

流域の人々と歩む月刊誌

くまがわ春秋

2018
10
第31号

隠れ里の神さん仏さん



初秋の「人吉盆地の夜明け」 © 山口啓二

火の国、水の国、
焼酎の国。

球磨焼酎

織月



前作(2015年)の
宇梶剛士



世界的な品評会で
金賞を受賞いたしました。

Los Angeles
Wine & Spirits
Competition 2015

飲酒は20歳を過ぎから、飲酒運転は法律で禁止されています。妊娠中や授乳期の飲酒は、胎児・乳児の発育に悪影響を及ぼすおそれがあります。

織月酒造株式会社
http://www.sengetsu.co.jp/
〒868-0052 熊本県人吉市新町1番地

月刊 くまがわ春秋 第31号 2018年10月15日発行

企画：人吉球磨総合研究会 発行：人吉中央出版社 TEL 0966-23-3759 / FAX 0966-23-3759
〒868-0015 熊本県人吉市下城本町1436-4の3号 http://www.hitooyoshi.co.jp/ info@hitooyoshi.co.jp

定価 540円 本体 500円

雑誌 81779-10-8



4910817791083
00500

最近のおもな出来事

- 9月20日(木)
▽相良三十三観音めぐり秋の一斉開帳(〜26日、人吉球磨観音35札所)
- 9月21日(金)
▽第4回人吉・球磨美術(絵画)連盟作品展(〜24日、多良木町民体育館)
- 9月22日(土)
▽動物フェスタ2018(人吉クラフトパーク石野公園)
- 9月23日(日)
▽第14回やまえ栗まつり(山江村体育館)
- ▽第11回人吉医療センター病院フェスティバル(同センター)
- 10月9日(火)
▽青井阿蘇神社おくんち祭り神幸行列(人吉市内)
- 10月11日(木)
▽ひとよし・くま市民劇場例会「劇団青年座『横浜短篇ホテル』(人吉市カルチャーパレス)
- 10月13日(土)
▽第15回ウンスンカルタ大会(人吉市鍛冶屋町通り)
- 10月14日(日)
▽第7回とっておきの音楽祭・第22回人吉ふれあい百円商店街(人吉市九日町一帯)
- ▽人吉くま映画文化協会第107回名画会「リトル・ダンサー」(あさぎり町深田せきれい館)
- ▽田んぼの学校inさがらむら(相良村内一帯)

10月(第31号) 目次

- 柳人があじわう漱石俳句 いわさき楊子…13
- 麦島勝追悼展…20**
- 大前提があった 前山光則…21
- 麦島写真はずい人の心を魅了するのか 石原浩…22
- 石橋を訪ねる⑬ 「新免眼鏡橋」…24
- 建築みてある記⑯ 「白雲山医王寺」 森山学…26
- あがつ段⑳ 上杉芳野…30
- 人吉球磨の「山と川」を歩く旅 遠山幸穂…32
- おてんばドクターのその後 大草知子…36
- 八代の魚…39
- 塩の話 上村雄一…40
- 外来語…英単語⑳ 藤原宏…42
- 老いらん道中⑦ 高橋昭三…43



特集・隠れ里の神さん仏さん

- やまえのほとけ展2018 大平和明…4
- 球磨・人吉地域の毘沙門天像を考える 大倉隆二…7
- くまがわの神さん仏さん⑯ 宮原信晃…14
- 相良三十三観音巡礼 廻観音再論…16

今月の一言

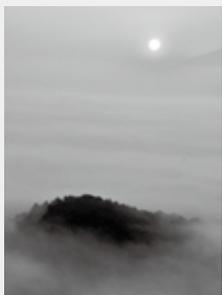
『文読む月日』(レフ・トルストイ編著 北御門二郎訳)より

人々が自分のことを話すのに聴き耳を立てる人には、絶対に心安らかなときはないであろう。

表紙写真

初秋の「人吉盆地の夜明け」

10月に入っても台風の進路におびえた今年だが、名物と言ってもいい人吉盆地の朝霧がようやく出現した。いつも霧の撮影を狙うのは人吉市の紅取山からの光景。季節は確実に回っていることを実感しながらシャッターを切った。



(山口啓一/人吉市)

特集・ジャーナリスト伊勢戸明②…44

週刊誌から「くまがわ春秋」へ 東慶治郎…45

伊勢戸さんの思い出 立山勝徳…51

生きた雑誌・生きたネットワーク 興野康也…53

この二十年の変化 桑原史佳…56

中里喜昭『百姓の川』について 上村雄一…59

記憶の落ち穂⑩ 坂本福治…55

鶴鶴短歌会 九月詠草…61

倉敷便り⑫ 原田正史…62

漢和字典は面白い⑭ 鶴上寛治…65

くまがわすじの考古地誌⑫ 木崎康弘…66

人吉藩の大水害⑬ 尾方保之…70

天草の「五足の靴」⑯ 富永和信…74

方言を味わう⑰ 前田一洋…76

小説・相良清兵衛⑩ 山口啓二…78

いもご短歌会…83

くまがわ学習塾⑫…83

外来語から学ぶ英単語⑬ 藤原 宏…82

ひろしの…げっかん・ぎひょう…87

おととわつとあすび⑰ 松舟博満…85

くまがわ学習塾⑯の答え…86

今月の秀句⑱ 永田満徳…84



本誌の
取扱店舗

■清藤書店 ■ブックスミスミ ■明屋書店 (錦店・免田店・多良木駅店)
■道の駅さかもと ■TSUTAYA 八代松江店

ほぼ「人吉城大絵図」のとおり



出土した石列について説明する岸田学芸員（中央）

史跡・人吉城跡の発掘調査が 日、現地説明会が開かれ、約50
進む旧人吉市役所跡地で9月24 名の歴史愛好家らが掘り出され

旧市役所跡地発掘調査説明会 雨天のなか歴史愛好家どっと

た石列や出土品など
を見学した。

調査場所は、駐
車場を含む旧市役
所全体の面積の約
1割で、江戸時代
に家臣たちの屋敷
となっていたこと
が人吉市教育委員
会保管の「人吉城
大絵図」に描かれ
ている場所。

発掘調査を担当



出土した器を見学する参加者

巻頭言

教科書を信じるな

文部科学省の教科書検定制度に疑問があるので、このようにいうのではない。凡庸なわたしたちは、むしろ子どもたちに、少なくとも教科書の内容は覚えて欲しいと願うべきだ。教科書は多年にわたって蓄積されてきた知的財産の定石集のひとつである。高校の入試問題は中学校までの教科書に記載されている内容以上の項目が出题されることはなく、大学入試は高校までの教科書を超えることはない。教科書を徹底的に読みこなせば入学試験を気にする必要はない。もちろん「徹底的に読む」は簡単ではなく、納得し、身につけるためには相当の努力が必要なのであって、省みて、中学の教科書の内容をいまだに習得していない事実を直面し、勉強不足を嘆く人は少なくないであろう。成人して、子どもるとき勉強しておけばよかったと反省する人が多いことは周知のとおり。「教科書を信じるな」の前に「教科書に学べ」がある。先日、ノーベル医学生理学賞を受賞した本庶佑博士は「教科書を信じるな」と学生に話すのを常にしているというが、博士の指摘は教科書を理解することを前提にしたうえでの助言であることを忘れるべきではない。

定石集のひとつである教科書を批判的に読むのは容易ではないが、書いてあることを鵜呑みにしてはならないのも確かであろう。だからといって、不都合と感じる情報を「フェイク」と断罪する傾向がみられるが、このような断罪は知的墮落である。説明せず他人にレッテルを貼る行為も知的墮落であろう。

入試の季節まで残りわずか。いろんな参考書にふりまわされることなく、くりかえし、教科書に立ち返って欲しいと子どもたちに話したい。私たちも中学生までの教科書の内容を知っておこう。子どもたちが何を勉強しているのかを知るのは大人の責務である。そして自己の知識を整理する機会でもある。

（春秋）

やまへのほとけ展2018

山江村歴史民俗資料館館長 大平和明

山江村歴史民俗資料館では、平成三十年度企画展として「やまへのほとけ展」を開催しています。山江村内のお堂などに安置されている仏さまを紹介しています。去年に引き続き第二弾の企画展です。

山江村は寺院が少ない地域です（現在は高寺院だけ）。しかし、集落ごとにお堂が数多く存しています。隠居庵の末寺と云われているお堂もみられます。このことは上村重次氏も「九州相良の寺院資料」の中で『仏堂を町村別に眺めると、五木村（四十三堂）、山江村（四十堂）の堂が多いのが目立つ』と指摘されています。そして、そのお堂の中に地方色豊かな仏さまが坐しておられます。

特集 隠れ里の神さん仏さん

山江村萩の雲海（C山口啓二）



今回の企画展では「薬師如来」「誕生仏」「釈迦涅槃図」に焦点を当ててみました。

「薬師如来」は、岩ヶ野堂と寺下薬師堂の薬師如来像、日光・月光菩薩像、十二神将像を紹介しています。岩ヶ野堂は江戸期、寺下は室町期の作と言われています。少し時代が違っている薬師如来を見ることが出来ます。

村内には四方所の薬師堂があります。山里の地で人々の病氣やけがを治してくれる薬師如来は現世利益の仏さまとして人気があったのかもしれません。

岩ヶ野堂



「誕生仏」は、灌仏会（花祭り）

「釈迦涅槃図」は智山堂と西福寺のものを並べています。

涅槃図とはお釈迦さまが涅槃、すなわち入滅（死）の情景を表した絵画です。時代が違っている二幅の涅槃図を見比べられるように展示しています。

また、日本遺産ス トリー構成文化財 になっている城山観



誕生仏

音堂の「木造十一面観音菩薩立像」や高寺院所蔵の仏像もいっしょに展示しています。

村内のお堂にある仏像は、京都や奈良の仏像とは違って豪華さや華やかさは見られませんが、何百年と地域の人たちによって守り継がれてきたものばかりです。何とも

静かで清浄な空間で数知れぬ人々が祈ってきた仏さまです。

仏さまを拝みに来られませんか、お待ちしています。

【おおひら・かずあき／山江村】



木造十一面観音菩薩立像

「やまへのほとけ展 2018」

- 開催期間 開催中～11月25日(日)まで
- 会場 山江村歴史民俗資料館 0966-23-3604
- 講演会 ①10月27日(土) 八代市立博物館 石原浩氏
②11月3日(土) 崇城大学図書館 中西真美子氏
時間は14:00～15:30
- 講演会場 山江村農村環境改善センター

球磨・人吉地域の毘沙門天像を考える

元熊本県立美術館 副館長 大倉隆二

球磨・人吉地域の毘沙門天像(とくに一メートル前後の小型毘沙門天)がやけに気になり始めたのは、二〇一四年、湯前町の溝下昌美氏や相良村の出合宏光氏のお世話により、相良村・山本神社前の毘沙門堂を調査した頃からだったように思う。同様の毘沙門天像はすでに何体も拝観していたが、以後溝下氏に案内していただき確認作業を続け、そろそろ表題のような論文でも書いたらと関連資料を収集・探訪しているところである。本稿ではそのアウトラインを紹介し、「そういう毘沙門天像はここにもある、あそこにもある」とのさらなる情報提供をお願いし、なるべく多くの毘沙門天像に目にかかりたいからでもある。

球磨・人吉地域(以下「球磨郡」と略称する)には

数多くの毘沙門天像が遺されている。優に四十件は超えるであろう。すべてを真見・調査した訳ではないが、溝下氏や人吉市の宮原信晃氏にお世話になり、私たち(島津義昭・佐藤征子・柳田快明・園田文彰他)が近年調査しただけでも二十件くらいに達する。これらのほとんどが平安時代末期の十二世紀から鎌倉時代にかけての制作で、相良氏入部以前に造立されたのである。しかし地元では存在そのものは知られてきたと思われるが、その造立年代や貴重さ、さらに様式的特徴にはほとんど気づかれてこなかったのだ。いわばすべてが新発見といえる。ともあれ、おそらく全国的に見てもこれほど多くの毘沙門天像が遺されている例はないのではあるまいか。

球磨郡の日本遺産認定作業には仏教美術の専門家が関わっていないかったためか「相良七百年の歴史と文化」

などと謳われているが、それよりも遡る平安時代からこの地域は仏教文化が繁栄してきた。むろん毘沙門天像以外にも平安時代に造立された如来像や観音菩薩像も多数存在する。球磨郡は平安時代以来千余年にわたり続いてきた「仏の里」、「仏国土」といふべきである。

普通であれば、平安時代の仏像が続々と発見されたとなれば、マスコミにも取り上げられ地域の話題にもなると思われる。が、私たちは関係者や市町村教育委員会に調査結果を報告しただけでとくに公にはしていない。

それは、鍵もかかつていない小堂や人家から離れた山中のお堂に安置されているものもあつて、文化財の保存環境としては不安に思われたからである。なるべく早い段階で、市町村教育委員会の指導によるしかるべき安全対策が講ぜられることを願っている。また、単に文化財としての安全面だけでなく管理面の問題もある。例えばお堂が古くなって建物の維持ができなくなった場合、近くの公民館に移され保管されている場合がある。ところがこれらの仏像が急に注目され、見学者が相次いだりすれば

くの毘沙門天像が遺されていることからみると、当時は戦闘に明け暮れていたのであろうか。どうもそうではないように思う。穏やかで人情豊かな球磨郡の人々の性格は、戦闘の少なかった土地柄によって形成されたものではないかと思えてならない。つまり毘沙門天信仰の内容については別の視点から見た方がよいと思われる。

仏教の経典・儀軌にはもちろん武闘神的性格を記す一方、福德・財宝をもたらす福德神としての性格も記されている。古代インドでの毘沙門天はまさに無尽蔵の財宝に囲まれていたのである。それゆえ後に「七福神」に取り込まれたりもした。『今昔物語』巻第十七「僧、依毘沙門天助令産金得便語第四十四」には、鞍馬寺の毘沙門天の靈験により、ある僧が女犯を犯した末に子を産んだと思えた女は失せ、跡には金塊が残り、僧はその金を売って豊かに暮らしたとの説話が見える。このように、平安時代末期には毘沙門天は、こうした福神として信仰され、それが球磨郡内にも及んでいたのである。それは次に述べる白鳥神社信仰とも深く関わっているかもしれない。

ば、地区の役員には公民館の解錠・施錠や立ち会いなど大きな負担がかかるようになる。個人蔵の場合も同様でその負担が大きければ、その維持管理が重荷となり敬遠されるようにもなりかねない。こうした問題は時間をかけ、個別、具体的に解決される必要がある。文化財の顕彰と保存、利活用と保存対策について地域や行政をあげての取り組みの必要性が痛感される。

球磨郡の毘沙門天信仰

一般に毘沙門天は「北方の守護神」「境界の守り神」などと説明され、武闘神とみられることが多いように思う。嗔恚(怒り)の表情をして、甲冑を身にまとい武器を手にして立つ武装姿はたしかに護法・護国の武闘神といえる。

もし球磨郡の毘沙門天信仰が、護法・護国の武闘神的信仰であつたとすれば、当時の人たちはいったい何処の誰と戦つたのであろうか。そうした記録は失われたのか元々存在しなかつたのかは知らないが、これだけ数多

球磨郡には霧島連山の二つ、えびの市の白鳥山に鎮座する白鳥神社を勧請した神社が各所に存在する。その祭神は日本武尊であるが、姿は毘沙門天に造られているものがある。えびの市の白鳥神社は霧島信仰を整備した性空上人が、白鳥山の六観音池の畔の六観音堂で修行中に感得したという日本武尊を白鳥権現として祀り、聖観音を本地仏としたという伝承がある。この伝承と日本武尊が毘沙門天として顕されたことは、熊襲征伐をした日本武尊はまさに武神であり、仏教の守護神・毘沙門天と習合したものと考えられよう。つまり、聖観音＝日本武尊(武神)＝毘沙門天となつたと考えられよう。球磨郡の平安時代の毘沙門天のなかに、このようなえびの市の白鳥神社信仰の影響を受け継いだものがあることが考えられ、現に白鳥神社の祭神として毘沙門天像を祀っているところもある。

また、『今昔物語』巻第十一「藤原伊勢人、始建鞍馬寺語 第三十五」には「観音ハ毘沙門也。我レ多聞天ノ侍者禪貳師童子也。観音ト毘沙門トハ、譬バ般若と法華トノ如ク也」とあるように、観音と毘沙門天は同

体と考えられていたのである。球磨郡の毘沙門天は、様々な現世利益を叶えてくれるという観音信仰と一体化したのももあつたのではなからうか。

剣・太刀を杖つく毘沙門天

毘沙門天像の一般的な姿は一方の手に宝塔を捧げ、もう一方の手に武器を執る。ところが、球磨郡内毘沙門天と伝えられる像の中には、両手を腹前で重ね、剣または太刀を杖つく姿の毘沙門天像がある。剣や太刀はすでに失われているが、両手を腹前に交差したり重ねたりした形から元は剣または太刀を杖つくようにして立つ持国天や増長天や広目天などとして造られた可能性がある。それゆえ、これらが伝えられるとおり毘沙門天像であるか否かは大いに議論の余地があるが、ここで問題としたいのは兜を被り冑を着けて、両手



① 隼人塚「増長天像」(霧島市)



② 隼人塚「広目天像」

を腹前に交差または重ねている像容である。

このような像容の天部像は法隆寺(持国天)や唐招提寺(持国天)などに奈良時代以来優れた木彫の作例があるがごく少数である。そうした中で思いうかぶのは鹿児島県霧島市の隼人塚の石造四天王像である。隼人塚には増長天(太刀を杖突く・写真①)と広目天(剣を杖突く・写真②)に比定されている二像がある。そのほか霧島市・安国寺の石造天部像も破損で確定はできないが両手を重ねているように見える。さらに、熊本県大津町・岩坂経塔にも剣を杖突く天部像浮き彫りがみられる。この塔は薩摩型とされる形式の層塔であり、隼人塚像とのつながりが考えられる作例である。以上は平安



③ 久保大日堂「毘沙門天像」(球磨郡錦町)



④ 久保大日堂「毘沙門天像」の両手

時代末期頃の作とみられているが、鎌倉時代と見られる石像が佐賀市に「しつてんさん」と呼ばれている四天王像がある。この中の一体も剣を杖突く像である。これは胴体が上下二段に造られていることから鎌倉時代以降の鹿児島県下で造られたのではないかと思われる。

では、球磨郡の両手を重ね剣や太刀を杖突くようにした例はどのようなものか。私は少なくとも木造の四例を確認している。しかし残念ながら先に述べたような事情から、ここでは一例しか挙げるできないことを遺憾とするが、ここでは錦町・久保大日堂の毘沙門天立像(写真③・④)を紹介しよう。本像は現在では不動明王とともに大日如来の協侍として安置されているが、本尊の大日如来像(室町時代の作と推定される)よりも古い鎌倉時代の作で、もとは観音菩薩の協侍として安置されたもののようにも見える。しかし、片手に塔を捧げる通常の毘沙門天とは異なるので、あるいは四天王像または二天像の一つで、毘沙門天ではなかった可能性がある。それはともかく、これまで私も含めて球磨郡の天部像

柳人があじわう漱石俳句

— ⑳ —

いわさき楊子



の中に両手を重ねて剣または太刀を杖突く像があることに注目する人はいなかった。私がこの像の存在に気づいたのは二〇一七年秋のことである。これより先二〇一六年七月二十九日、溝下氏の案内で人吉市内で両手を重ね、剣または太刀を杖突く像を発見したのが最初であった。その後あさぎり町で二〇一五年五月三〇日に調査したもののなかに少なくとも二体含まれていることに気づいたのは最近のことである。私にとって二〇一六年七月二十九日は忘れられない日となった。

これらはいずれも剣または太刀は失われているが、隼人塚の像と同じく兜を被った甲冑像で、両手を腹前に重ねている。隼人塚の天部像の像容については、中国・唐時代の影響を受けたとみられる唐招提寺、法隆寺、興福寺などの諸像の影響とは別に、中国・南宋時代の石像武人像の影響が薩摩・大隅地方に及んだ可能性が指摘されている（末吉武史氏他）。が、いまこの問題に深入りするつもりはない。ここで問題としたいのは球磨地域と薩摩・大隅地方との関わりである。隼人塚像を含め薩摩・大隅ゆかりの石像は四件で、霧島市・安国寺像

を含めても五件である。球磨郡の像はすべて木造であるが集中的に四件も存在するのである。これは平安時代末期から鎌倉時代にかけて、薩摩・大隅地域と球磨郡が同一文化圏を成していた可能性を示唆するものと考えている。いまのところこれ以上の資料を知らないが、さらに資料の集積をはかるべく球磨郡内はもとより薩摩・大隅地方まで調査・探訪を続けているところである。以上、球磨郡の毘沙門天像について現在考えていることのアウトラインを紹介した。信仰内容には宮崎県えびの市の白鳥神社の影響もあること、像容からは薩摩・大隅地域と同一文化圏を成していた可能性があることを指摘した。まだ、いろいろと詰める必要があるが、球磨郡の毘沙門天をつうじて、球磨郡は宮崎・鹿児島両県と地理的な近さ以上に深い関わりがあることを感じさせられたところである。

【おおくら・りゅうじ／玉名市】

— スポーツが好きだった —

漱石は近代日本文学の基礎を築いた一人だということは周知のこと。だが青年のころは意外にもスポーツが好きだった。そのころの若者の楽しみは今のようによくの種類のなかつたとはいえず、いろいろなスポーツを経験している。大学時代は、器械体操がとてもうまかった。ボート、水泳、乗馬、庭球も体験している。五高教師時代は短艇（ボート部）の部長だった。

弦音にほたりと落る椿かな
(漱石27歳)
弦音になれて来て鳴く小鳥かな
(漱石27歳)

若いころは流行った大弓をかなり稽古していた。書簡に記した弓の句が4句みられる。

1 句目は「ほたり」という音のオノマトペが静かさを深遠なものにして格調高い。2 句目は漱石らしい小鳥へのやさしいまなざしがみられる。

相撲取の屈托顔や午の雨

(漱石31歳)

血気盛んな土俵上の顔ではなく、精気のない相撲取りの顔に午の雨を取り合わせて詠んだことに俳味がある。相撲を勝負だけではなく、力士の内面までも観察している。後年には国技館にも通って熱心に観戦している。力士は太刀山がひいきだった。

おもしろいのはロンドン留学中に「西洋の相撲」を見に行っている事だ。いわゆるプロレス興行だ。相撲とちがひ、勝ち負けがすつきりしないことに、「…大いに埒のあかない…坐り相撲の子分見たやうな真似をして居る…」と書いている。その後の文学に影響する東洋と西洋の違いをこんなところにも感じたのだ。

高跳は身長別にしては、い、
やり投げは民俗学的に勝てぬ
わが町の五輪選手で町おこし

【いわさき楊子／川柳と俳句の愛好家、熊本市在住】

くまがわの神さん仏さん 26

山江村合戦峰観音堂

宮原信晃

高速道人吉インターからほど近い吉村皮膚科がある交差点から、北へ向かうこと400mで、「合戦峰観音堂」へ着く。

最近新しく駐車場が出来て便利になった。洋式トイレも完備され

ご接待の建物も新品だ。観音堂の前でお賽銭をいれてお参りし、お堂の中に入る。

私の父宮原十郎作と思われる石仏が観音様の右隣りに鎮座するが未だに尊名が解らないのだ。



合戦峰ボランティアの田村四郎さん



宮原十郎作と思われる石仏

「今から20年くらい前にどなたかが持ってきた」と合戦峰ボランティアの田村四郎さんから教えて頂いた。その道に詳しい江藤和幸さんが「化仏があるから観音で間違いはない。ですが不空羅索観音とは異なります。つまり、儀軌にそった仏像ではないということ。石工さんが創造した観音様となります」とのこと。どんな仏様を彫ろうとしたのかあの世で父に聞いてみたいと思った。

この合戦峰観音堂のもう一つの特徴は、この観音堂は一段高い場所にあるが、その中段に「山田村の傳助殉教地」がある。山江村の教育委員会が作られた説明の看板に「寛政八年（1796年）傳助は

禁制を破った罪で獄門に処された。明治三十六年（1903年）仏飯講百五十年のおり、合戦峰に傳助供養碑を建て」とあるが、その供養碑には「宝曆十二年」（1761年）と刻んだ文字が見えるのだ。説明書きと石碑が異なっているではないか。

ある上球磨のお寺の供養碑には「天明二年」（1782年）と刻んであるので、何と3つも処刑された年号が各所に並んでいるのだ。

しかも、合戦峰観音堂は「相良新四国札所巡り」の87番奥の院と大きく説明書きがあるので、その87番の聖泉禅院（永田観音の場所）に行ってみると、山門の登り口に見た覚えのある（作右衛門の作か）左膝を立てたお地藏さんがいるではないか。

昔々の人吉球磨の代表的なお地藏さんである。その「左膝立て」のお地藏さんの後ろを見て驚いた。

「天明二年（1782年）壬寅」と細い線ではあるが見えるのだ。山田の傳助さんが亡くなった年だ。まさか、あの傳助さんが処刑されて人吉藩は後々に人々に崇らないように、この聖泉禅院に頼んだのだろうか。



作右衛門の作と思われるお地藏さん

このお地藏さんを、残された一向宗の人達が「南無地藏尊」ではなく「南無阿弥陀仏」と手を合わせて参った場所ではなかったか。合戦峰観音堂と聖泉禅院とを結ぶのは、この左膝を立てたお地藏さんだったのかと、考えて、考えて、今夜も眠れなくなりました。

【みやはら・のぶあき／FBお地藏さん調査隊代表・人吉おおくま座の会事務局】



合戦峰の中段にある山田村の傳助殉教地

相良三十三観音巡礼

めぐりかんの 廻観音再論(相良村)

同観音については本誌24号36頁以下でその魅力に触れた。今回は、その補足である。

表記問題

同観音は、「めぐり」地区にある。そこで同地区の行政表記である「廻」を重視し、「廻観音」とした。同観音堂の説明柱も「廻観音」としている。これに対して、「廻



「めぐり」表記の例(上・下)



「廻」表記の例



「廻り」表記の例



「巡り」表記の例。同バス停は対岸の小森地区にある。三十三観音巡礼を意識してバス停名を「巡り」にしたようである

り観音」とする例も多い。「廻」の二字の場合、「めぐり」ではなく「めぐる」と誤読される可能性を考慮しての表現であろう。「巡り」と表記する例もある。「めぐり」の漢字表記として「廻」と「巡」のどちらが適切であるかは「めぐり」地区の地名由来に関係する。地元では対岸(川辺川左岸)の人が下流の橋を渡って(めぐって)同観音堂を参拝したことに地名は由来すると伝えられている。その伝承にしたがえば、「廻り」が適切であろう。しかし同時に、地元によれば、平仮名「めぐり」が同地区の正式表記で、運動会などの行事でも「めぐり」の平仮名表記であったとのこと。「廻」、「廻り」、「巡り」は「めぐり」の当て字で、「めぐり」が正しいとの説明をい

ただいた。確かに、観音堂本堂の看板も「めぐり」となっている。地名は行政によって一方的に決定されるものではなく、地元感情を尊重すべきである。そこで、これからは、「めぐり観音」と表記したい。三十三観音巡礼の観音像を平仮名表記するのは異例だが、例外もあってもいいだろう。「廻り観音」も送り仮名を付している点で他の観音の表記方法とは違っている。漢字表記で全体を統一するのであれば「廻観音」とするほかない。

機会として重視なさっているようである。年配の人と若い人の意見交換が楽しみであるとのこと意見も各地でうかがった。ただし準備は大変である。朝3時頃から接待の準備をなさっていたり、前日に準備をすませてしまわれていた地区もあった。三十三観音巡礼にかぎらず、お祭りのときにはどうしてもそうになってしまうのだが、人間の体力には限りがある。1回かぎりであれば無理もきくが連日は厳しい。

接待

三十三観音巡礼の魅力のひとつである。その土地の「漬物」、「煮染め」を味わえるだけでなく、地元の人と交流できる格好の場である。地元民も、地元内の意思疎通を強める



接待がない日の様子。参拝者もなく閑散としていた



めぐり地区の接待に出されていたもの



接待の方からお話を聞く

帯数も少なくなり、足の速い子どもたちが多くいる地区で、運動会の地区対抗競争では「1位」を独占していたとのこと。片道6キロ半の通学距離が子どももの脚力を強くしていたのだろうと地元の人は笑って説明してくれた。しかし、雇用の場がないことなどから、人口の流出がつづき、巡礼日の毎回の「接待」はしだいに難しくなり、今年から、初日、中日、末日の3回に接待を限定する



現在のめぐり地区。以前は山林関係の従事者が多かった

ことにしたとのこと。残念だが、無理はいえない。地元状況にみあった接待で十分である。個人的には、お茶と漬物で十分である。本誌30号38頁以下でアメリカ人のエンブリーによる昭和10年の三十三観音巡礼の記録を紹介したが、当時と同じ程度の接待で私は満足する。ところでエンブリーは「豆」が接待に出されると記録していて、その豆の種類が気になっていたのだが、どうやら、「せさ



同地区には河童の墓（上）や庚神塔などもある（下）



「げ」のようである。「せさげ」は、昔は高価な食材として珍重されていたとのこと。めぐり地区は「せさげ」を接待に提供する習慣はないとのことであった。

地域の過疎化・高齢化は急速にすすんでいる。めぐり地区のように接待日を限定する、あるいは接待を止めるところも登場するのではないかと心配するが、現在の地方政策・人口政策がつづくかぎりやむをえない。それは

地区、地域、自治体で解決できる問題ではない。国の政策の問題である。

川辺川

めぐり観音の前を流れる川辺川は清流である。「水質日本一」の評価に誤りはない。今年9月は、蒲島県知事が川辺川ダム建設中止の方針を表明して10年にあたる。

しかし、ダム建設中止は法律上決定しているわけではない。ダム建設促進を支持する知事が登場すれば、川辺川ダム建設計画が復活する可能性は十分にある。めぐり地区の人に鮎は取れますかとうかがった。たくさん取れますよと即答なされた。ダム建設政策が復活すれば、水質日本一の名称も鮎も「めぐり観音」の前から失われる。彼岸過ぎて、そのことが改めて、胸に浮かんだ。



めぐり観音横を流れる川辺川



川辺川の釣り人

（春秋）

麦島勝追悼展

終戦直後から平成にいたるまで球磨川流域の「日常」を撮りつづけた写真家・麦島勝さんの追悼写真展が、9月20日から10月2日までのあいだ、



「みんなで麦島写真を語ろう会」(9月22日、喫茶店ミックにて)

八代駅前の喫茶店ミックで開催された。同喫茶店内には代表作が展示され、多くの麦島ファンが展示写真に見入っていた。

9月22日には特別企画「みんなで麦島写真を語ろう会」が同店であった。本誌27号で特集したように、本



出水晃さん



ごあいさつ
麦島勝氏は「日常」という視点で郷土を撮り続けた写真家です。「そぎゃんとば撮って何になるか!」と写真仲間には揶揄されながらも無心に撮り続けた写真には、昭和・平成という時代の風物や風情が見事に刻み込まれています。
一枚一枚は些細な写真かもしれませんが、しかし10枚20枚と見ていくうちに、我々は氏の人生を追体験しているかのような不思議な想いに駆られます。
麦島勝氏は昭和2年(1927)7月25日、八代町に生まれ、平成30年(2018)5月17日、心不全のため永眠、享年90歳でした。麦島氏を偲び、ここに追悼写真展を開催いたします。
珈琲店ミック 出水 晃

誌編集部も麦島写真を重要であると考えているため「語ろう会」に参加参加者のさまざまな意見・感想に接した。そのすべてを紹介する余裕はないが今回は、企画者であるミックの店主・出水晃さん、麦島写真の出版にたずさわってきた作家の前山光則さん、八代市立博物館未来の森ミュー



大前提があった

作家 前山光則

麦島勝さんについてはこれまで何度も書いたり喋ったりしてきた。書きながら、喋りながら、我ながら

ジアムの石原浩さんの説明・解説を、同店並びに3人の許可を得てそのまま転載することにするが、麦島写真に接するとき、私たちは殊に高度成長期を通じて、なにを得て何を失ったのか、を考えざるをえないと思うのである。麦島写真の詳細については本誌第27号参照のこと。(編集部)

多弁になってしまっているなあ、と、いつも思う。だが、実はこれはわたしだけではないはずで、麦島さんの写真を目にする誰かが頭脳を刺激されてそうなる。麦島写真ワールドは、ファンをそうさせるだけの広さ・深さを持っているのである。

ただ、今にして気が咎めていることがある。それは、麦島さんが写真家として厳しい原則を持っている

た、ということ。このことについて今までちゃんと言及しなかった。三年前の春、人吉市の人吉クラフトパーク石野公園で写真愛好家たちの撮影会が行われた際に、お伴をした。その頃の麦島さんは脚が不自由になっていたもので、わたしは運転手役だった。麦島さんは久しぶりの外出で、参加者の多くが「お元気ですね」「ご無沙汰しました」「今日、よろしく…」などと声をかけてくれるし、モデル嬢たちは皆かわゆい。御機嫌であった。ところが、撮影会が始まってしばらくすると、公園の真中でアトラクションとして人吉の民俗伝統芸能「臼太鼓踊り」の実演が行われた。麦島さんは観客たちの後ろの方からこやかな顔つきで眺めていたが、しば

らしくてにわかに表情が険しくなってきた。

撮影会の参加者たちがステージの前に集まり、一所懸命にカメラを壇上へ向けている。中に数人、ステージへ身を乗り出して出演者に迫っていたのである。「そこから下がらないさい、上演の邪魔をしてはいかんじゃないか!」

麦島さんが声を張り上げた。絶対許さんぞというような、見ているこちらが震え上がってしまうくらいに厳しい表情だった。「駄目じゃないか、すぐに下がらなさい!」

麦島さんはもう一度きつく叱りつけた。ステージに張り付き、這い上がりかけていた数人は、雷のような怒声が後ろから飛んできたので恐怖の体(てい)で引き下がった。麦島

さんは、しばらくの間、怖い顔つきを緩めなかった。

麦島さんは写真で人々の生活を記録することに一生かけてこだわり、撮り続けたが、しかしそれは、被写体に迷惑をかけぬことが大前提としてあったのだ。これは絶対に忘れてならぬ、大事な大前提だと言っただけ。

麦島写真はなぜ人の心を魅了するのか

八代市立博物館未来の森ミュージアム学芸員 石原 浩



平成30年5月17日、麦島勝氏が永眠された。死因は心不全、享年90歳の大往生だった。

氏は、昭和2年(1927)八代市生まれ、郷土八代を中心に県内各地に暮らす人々を撮り続けた写真家

である。氏が撮影した写真は、風光明媚な風景写真でも世間を賑わす報道写真でもない。山村や漁村、街に暮らす人々の「日常」を、戦後70年にわたり、ただ、ひたすら、撮り続けた。

「日常」を捉えた写真の魅力はどこにあるのか。身近な被写体を、日記

を綴るように撮り続けていると、普段気にもとめない日常のなかに、様々な表情が見えてくる。

この些細な表情を捉えたところに麦島写真の魅力がある。

氏の写真家としての最大の魅力は、人々の自然な表情を引き出すセンス。働く男女やくつろぐ人々、遊

びまわる子どもたち等々、氏がカメラを構えるその先にカメラを気にする人物はひとりもない。自然な表情で普段どおりに振る舞う人々ばかりである。そして背景の景観も相まって時代の空気まで伝えるリアリティーがある。

日本を代表する映画監督といえば、黒澤明と小津

安二郎の名が浮かぶ。黒澤は、『七人の侍』や『天国と地獄』など、センセーショナルなストーリーと緊迫感あふれる映像美で人々を魅了した。対する小津は『お茶漬の味』や『東京物語』など、日常生活にみられる些細な出来事を繊細に描き、『世界の小津』と評される。写真家でいえば、黒澤映画のようなインパクトのある写真を撮ったのが土門拳。そして小津安二郎のような繊細な眼差しで日常を捉えたのが麦島勝ではないだろうか。

熊本地震を経験した我々は、日常の大切さ、人と人が繋がることのあるありがたさを痛感したばかり。そんな我々だからこそ、いま誰よりも麦島写真の魅力を「鋭く」そして「繊細」に感じることができないのではないだろうか。



新免眼鏡橋

八代市二見町字新免



美しいアーチ型の新免眼鏡橋

嘉永6年(1853)7月に田浦手永惣庄屋が架橋を命じられていることから(松山文三「薩摩街道と眼鏡橋」『二見校区50年小史』所収)215頁参照、嘉永年間末から安政年間初頭の作であろう。二見川(当時は「新免川」といった)に架橋。長さ11・93m、幅3・42m、径間10・14m。旧薩摩街道にある。

岩永三五郎の作と説明される場合があるが、三五郎は嘉永4年(1851年)に病死しており、この橋は三五郎の作品ではない。計



画段階で三五郎が関係していた可能性は残るが、それを確認する記録は残っていない。旧薩摩街道には、三五郎作とされる石橋が多数あるが、三五郎の作であるかについては、三五郎の弟・三平の作とされる石橋(津奈木町に多い)を含めて、慎



重に検討すべきである。
石橋そのものは美しいアーチ型で、三五郎作でないとしても、種山石工の作とみていい。石は凝灰岩。一部はコンクリートで補修されて生

活道路の一部として現在でも利用されている。橋の南側(国道3号線下側)に、「十五里木」跡がある。橋周辺を歩くと往時の薩摩街道の道筋を実感できる。

嘉永6年は黒船が日本にやってきたときである。志士たちは周囲の景色を楽しむことなく薩摩街道を急いだのであろう。(春秋)



駕籠休所

白雲山医王寺をあるく

森山 学



写真① 本堂。中央に唐破風、左右に火灯笼

八代市袋町の医王寺(写真①)には、二体の巨大な石造金剛力士像(写真②)がある。これは、延宝三年(一六七五)に妙見宮(現八代神社)に奉納されたものである。慶応四年(一八六八)の神仏分離令をうけ、木造妙見菩薩立像や銅像鎮宅霊符三神像などとともに当寺院に移されている。

最寄りのバス停は宮の町。バス停から一分程歩くと、鉄筋コンクリート造の薬師堂(昭和五四年＝一九七九建設)、その背後に医王寺本堂、本堂前に力強く控えている金剛力士像が見えてくる。「力強く」と書いたが、まさに力士のような巨体で、しかも筋肉質



写真② 石造金剛力士像

おそろしい顔をしているが、それでも大変失礼な言い方であるが、どこことなく愛嬌があつてかわいらしい。

薬師堂も本堂も「宝形造」と呼ばれるピラミッド型の屋根をして、頂上に宝珠を頂く。薬師堂は本堂を模したものであろう。本堂の屋根は昭和五四年(一九七九)に葺き替えられた棧瓦葺

の屋根で、瓦製の宝珠(写真③)は大きく迫力がある。これ以前には本瓦葺であつたらしい。また正面の向拝(参拝するために庇などがかけられた空間)には「唐破風」(写真④)と呼ばれるカーブを描く屋根がある。

建物は、仏壇の出っ張りを除けば三



写真③ 本堂の上の宝珠。大唐破風の上の獅子口

間四方の正方形で、一辺約七メートル。棟札によれば寛文五年(一六六五)の建設である。当時は茅葺きだつたらしく、昭和二年(一九二七)発行の『八代郡誌』にも身舎は茅葺きと記されている。

ここで寛文五年(一六六五)以前の



写真④ 大唐破風。カーブの上部の彫刻が兎毛通。カーブの下部の彫刻が降懸魚。写真中央が大瓶束笈型という形式の中備

天正年間(一五七三～九三)に破却され、その跡地は「薬師森」とよばれたようである。

八代城が現在の松江の地に再建されたとき(元和八年＝一六二二年)、薬師森は開かれて城下町の一部になるが、その薬師森跡に小堂が建てられ、本尊が安置された。

細川三斎亡き(正保二年＝一六四五)後、八代は城主・松井時代となるが、その寛文二年(一六六二)に移転、さらにその三年後に、松井直之の母・崇芳院尼の願いにより現在地に移転する。このとき、山伏・寶光院玄童を住職とし、松井家の祈祷所とした。

このときの寛文五年（一六六五）の棟札には「奉再興薬師堂」とあり、当初はいまだ「医王寺」の再興ではなかったと言えよう。由来書によれば、その後、寶光院玄竜が智積院に入り真言僧となったため、真言宗高野山成福寺末寺となった、とあり、この際に「医王寺」になったのであろう。

さて建物に戻ろう。正面の大唐破風は松井家ゆかりの寺院ゆえであろう。大唐破風の屋根の上の獅子口と巴瓦には細川家または八代神社（旧妙見宮）の九曜紋がある。本瓦葺き時代にはこの九曜紋の他に、松井家の三つ笹紋も本堂にあつたようである。今は、左手の塀と境内の青面金剛堂（足手荒神）本殿の屋根に三つ笹紋が見られる。また今はない山門の部材が薬師堂に保管されているが、この部材にも三つ笹紋がある。



写真⑤ 御輿寄せ

大唐破風の彫刻を見ると、兔毛通はぶどう、降懸魚はぶどうの葉の彫刻である。向拝柱の組物や向拝虹梁（虹梁は社寺によく用いられる形の梁）の中備（虹梁の上に立つ束）は大きく重厚である。

に彫刻板支輪がある。須弥壇には木造妙見菩薩立像と弘法大師坐像、仏壇には胎蔵界大日如来坐像と光明曼荼羅と不動明王立像がある。

その左右には脇仏壇があり、右側には銅像鎮宅霊符三神像、木造妙見菩薩立像など、左側には傳大士像などが安置されている。

棟札の通り、城主自ら祈禱所に取り上げ命じた工事であるが、使用している材料に着目すれば、五本の柱に面皮



写真⑦ 青面金剛堂拝殿の墓股

ちなみに大唐破風のある寺院本堂は、八代市内ではこと松井家菩提所・春光寺の二件のみである。

正面には、開閉できないよう固定されているが、かつての部戸（上に迫り上げて開く戸）が立てられており、旧状を保存している。左右には火灯笼（上部が尖り、炎のような形をした窓）がある。

この本堂の右手に屋根がかかる壁が立ち、ここにも入口がある。これは城主御成りの御輿寄せである（写真⑤）。扉は観音開きで、屋根は目板瓦で葺かれており、軒は持送りつきの腕木で支えてある。まさに城主を迎える由緒ある寺院であることを証明する貴重な遺構である。

中も見せていただこう（写真⑥）。内陣中央に須弥壇と仏壇があり、丸柱の来迎柱が二本立ち、その間の天井下

が大きく残っており、大きな材料を手でできなかったか、急ごしらえであった様子がかがえる。

境内にはその他、浄心石塔（正平十六年＝一三六一年）、庚申碑（寛文十二年＝一六七二年）、青面金剛堂（足手荒神）（寛文五年＝一六六五年以降）などがある。

青面金剛堂の拝殿には、虹梁の中備に八代神社（旧妙見宮）の社紋・丸に二引き両紋の墓股（カエルが足を広げたような形の部材）（写真⑦）がある。これは建物の規模に対し大きく印象的であり、もしかしたら神仏分離時に八代神社の建物、または部材を再利用したのかもしれない。

熊本地震後、本堂左側を鉄骨でつつかえ棒する応急処置が施してある。

【もりやま・まなぶ／高専教員、一級建築士、八代市】



写真⑥ 堂内。中央に須弥壇



上杉芳野の「あがつ段」②⑧

夫婦揃ってテレビ生出演



「苦難・失敗笑いかえて」という本を私が出版してから講演の依頼が多くなった。

熊本市南区の川尻の福祉祭りに行ったのがご縁で、

TKUというテレビ会社から夫婦揃っての出演の依頼がきた。

主人が子供達に剣道の稽古をつけているところや、

子供達と稲刈りと竿掛けをしているところを取材してもらい、私は以前勤めていた薬師温泉の祭りでバスガイドの姿で司会進行する場面を取材して頂いた。

いよいよ9月25日、「英太郎のかたらんね」の本番生放送の日となった。出掛ける前に娘の夢都美が「お母さん、本番中にオ

ナラ出しなんなよ」と心配してくれた。

熊本市のTKUスタジオには私の友人二人と、以前私の40分間のドキュメンタリーを作るために10日間密着取材して頂き、家族のようなお付き合いをして下さっている福田晶ちゃん親子の姿もあり、私の知っている顔があるだけで気軽に本番を迎える事が出来た。

旧上村出身の恒松アナウンサーの姿が見られなかったのが残念に思った。

衣装はそれぞれのボランティアしている姿で登場。

主人は剣道着で、私はバスガール姿であさぎり町の

旗を持って登場した。本番とは思えない程のスタジオ内の温かい雰囲気の中、い

つも通り気楽に話すことが出来た。

テレビで見る英太郎さん



はとても大きな人と思っはいたが、横に並んでみると確かに大きな人で私の頭は英太郎さんの胸の下で、下腹での子の私もあり目立たなかった。何を言っても軽く受け止めて下さる心の広いお人だなあと思った。

他のスタッフの人達も明るく笑顔で受け入れて頂き、送り出してもらった。

私達の住む所まで取材に来て頂いた英太郎さんに負けないくらい大きい、さおりちゃん。取材から編集までしているとのこと。若いのに感心した。

ある人が私とさおりちゃんが話しているところを見て「本当の親子のぐたる」と言われた。私も自分の娘のように思い接した。

「さおりちゃん、いつでも近くに來たら寄らないよ」。この番組を見て頂いた方々が薬師温泉ヘルシーランドやあさぎり町の事を

知って頂ければありがたいと思う。

放送の出演が終わり帰宅した途端、「プーン」と私のオナラが出た。

それを聞いた主人が「しもーた、結婚して3日目に、へーしたつばい、芳野はへーふり虫だけん」って番組で言えば良かったと大笑いした。

たくさんの人達から、おもしろかった、感動したとの声を聞きテレビに出させて頂いたことに、関係者の方々に感謝の気持ちでいっぱいである。

【うえずぎ・よしの／ボランティア観光バスガール、あさぎり町上】

人吉球磨の「山と川」を歩く旅

1000m超の山が31カ所も

元「週刊ひとよし」編集部 遠山幸穂

「ロングトレイル」の実現を

尾根伝いに盆地をぐるり



アポロ峠近くの大規模林道から望む雲海。向こう側中央の山は白髪岳。その右奥に韓国岳が見える

国土地理院発行の25000分の1の地図を見てみると、人吉球磨地域で標高1000メートルを超える山の数はなんと31カ所もある。名前が表記されていないピークを含めると50を超えそうだ。「意外」と思う人は少なくないと思われるが、この「意外」な自然環境を活かさない手はない。

山を高い順に並べてみると、

市房山	1721m (水上村)
白鳥山	1639m (同)
江代山	1607m (同)
山犬切	1562m (同)
高塚山	1508m (同・五木村)
銚子笠	1489m (水上村)
鷹巣山	1454m (五木村)
蕨野山	1438m (同)

白髪岳	1417m (あさぎり町)
積岩山	1414m (五木村)
仰烏帽子山	1302m (山江村・相良村)
国見山	1253m (五木村)
白髪山	1244m (同)
三方山	1236m (同・水上村)
猪ノ子伏	1233m (あさぎり町)
国見山	1229m (同)
陀来水岳	1204m (同)
高岳	1189m (山江村)
広貝山	1187m (五木村・多良木町)
小白髪岳	1183m (あさぎり町)
茶臼峠	1176m (五木村)
三尾山	1173m (山江村・相良村)
八原岳	1150m (五木村)
六本杉山	1149m (五木村)
平石山	1130m (同)
大平山	1120m (錦町)
花立山	1106m (多良木町・湯前町)



市房山山頂のツクシアケボノツツジ。年々花の数が少なくなっているのが気がか



高塚山登山道途中の分岐点に、地元の登山グループが立てた案内板

湯ノ原山 1063m (多良木町)
 国見岳 1031m (五木村)
 黒原山 1017m (あさぎり町・多良木町)
 白岩山 1002m (球磨村・山江村)
 となる。この中にご存知の山はいくつあるだろうか。

「球磨三山」と呼ばれる市房山・白髪岳・仰烏帽子山はよく知られているが、大半はほとんど馴染みがない。

しかし、登ったことはなくてもその姿は普段の景色に当たり前のように溶け込んでいて、欠かすことのできないシンボルになっている。

その昔、山岳信仰が人々の暮らしに密着していたことを容易に想像させる名残や、今も珍しい動植物を育む貴重な環境を保っていたりと、訪れてみなければ分からない魅力に出合うことが出来る。また、峠や谷を越えると植生ががらりと変わるなど山は個性にあふれており、頂上からの眺めも非日常的で印象深い。

ヤマシャクヤク・カタクリ・ヒトリシズカ・トリカブト・アケボノソウ・リンドウなど四季折々の花々の群生地、カエデ・ブナ・モミ・ツガ・アカガシ・ヤブツバキの老木・巨木などなど、特徴を挙げればきりが無い。

これらの山を点で繋げば、人吉盆地をぐるりと一周することができる。いま、老若男女を問わず、山登りやトレッキングなどアウトドアがブームだ。お気に入りのスタイルで全国の有名な山に挑んでいる若い女性たちの姿も多くなった。

ロングトレイルは「歩く旅」のこと。登頂を目指す登

山とは違い、登山道はもちろん既存の林道・里山・田畑のあぜ道、時には車道も活用しながら地域の自然や文化、歴史に触れることを目的としている。指定された場所ですべての宿泊施設を利用しながら歩く。

このブームを地域おこしにつなげようと、観光活性化を目標に全国で個性的なロングトレイルコースが次々に誕生している。特定非営利活動法人日本トレイル協会に加盟しているコースは、北海道・青森・群馬・石川・滋賀・広島・大分などで現在16カ所、整備・計画中のもも含めると20を超える。

ロングというだけあって距離はそれぞれだが、山の稜線などを参加者のレベルとペースに合わせて歩く1000キロ前後のコースが主流。最長は「広島湾岸トレイル」の289・1キロ。長野県松本市〜新潟県糸魚川までの「塩の道（120キロ）」は、途中の宿場町では食材や食事の提供、温泉など地域の特性を活かした受入態勢で利用者を増やしているという。

人吉球磨の場合は、球磨川に注ぐ支流の数も豊富だ。私が以前取材した頃と比べると「溪相」がすっかり変わった。

てしまった場所もあるが、歩きでなければ出合えない風景・景色は今もしっかりと残っている。

「山と川」を融合させたロングトレイルコースの開発は、球磨川流域の市町村はもちろん、自然を大切に残したいと願っている地元の人たちの思いが一つになって取り組むことができれば、実現する日はそう遠くないのかもしれない。

【とおやま・ゆきほ／球磨郡あまぎ町】



積岩山登山道沿いに群生しているアケボノソウ



山犬切近くにあるトリカブトの群生地。斜面を覆う紫の花は圧巻

おてんばドクターのその後



Tomoko Ohkusa
大草知子



「おてんばドクターの途中下車」
人吉中央出版社（2015年5月発行）

皆さま〜！ お久しぶりでございます。私は2013年3月から2015年5月まで、ひよんなご縁から「週刊ひとよし」に「おてんばドクターの途中下車」という記事を掲載していただきました。さらに、全記事を2015年5月には「おてんばドクターの途中下車」として自費出版させていただきました。出版社の皆様をはじめ、たくさんの方々の多大なるご尽力のおかげと心より感

謝しております。

前例のない猛暑、酷暑の2018年8月上旬、上村雄一さまより執筆依頼を受けました。上村雄一さまには、「おてんばドクターの途中下車」の書評を「シイナとオオクサ」という題名で「週刊ひとよし」に書いていただき、身に余る評価を頂き大変恐縮したものでした。上村さまからの依頼であれば、断るわけにはいかず、かといって原稿締切りの期日には間に合わない…。どうしたものかと事情をお話したら、期限を延期していただけるとのことで、お引き受けいたしました。

そうです！ ドクターは還暦を迎えても相変わらず「おてんば」、今では毎年3月にカナダのイエローナイフで開催される「カナディアン チャン

ピオンシップ 犬ぞりレース」に出場するのが通例になるほどの「真のおてんば」になっています。その「おてんば」がますますエスカレートし、8月下旬からはその集大成として、長年の夢だった「アフリカ大陸で野生動物を観察する旅」にでかけるタイミングでした。

サファリ帽子、カメラ、探検靴等、はやる気持ちを抑えつつ、持ち物の準備を万全に

しました。出発当日

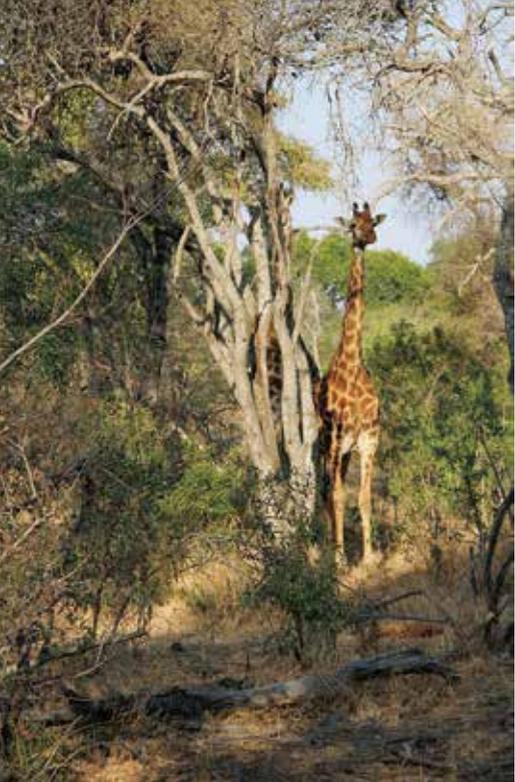
は、航空機の遅延のため、経路がいきなり成田〜香港〜ヨハネスブルグが、成田〜シンガポール〜ヨハネスブルグに変更になりました



た。出だしにまづぎましたが、その後は万事順調に経過しました。

アフリカ大陸では、ジンバブエのチヨベ国立公園と南アフリカ共和国のクルーガ国立公

園で、野生動物の観察に出かけました。ボートやトヨタのオープンカー、ランドクルーザーに乗って野生動物を探します。動物たちがあるがままに生活している場所を、新参者の「人間」がおじゃまするので、ベテランのレンジャー2名が同行します。詳細な注意事項（奇声をあげない、騒がない、しゃべるときは低音小声、立ち上がらない、ごそごそしない、頭と眼のみゆっくり動かす、等々）の説明をう



け、いざ出発です。ところがレンジャーは護衛用ライフルを持っていません。

不安になったドクターは質問しました。「あ、あ、あの、護衛用ライフルは無くても大丈夫ですか？？」

きました。

今回の途中下車を終え、還暦を迎えたドクターですが、まだまだ学ばべき事がたくさんあること、命が尽きるまでお勉強、お勉強と、身をもつて経験しました。誰かの言葉、「ほつと してんじゃね〜よ！」の意味、しっかりと理解できたような気がします。以下に今回の途中下車での学びを書いてみました。

・「命」をあつかうドクターとして、「命の重み、はかなさ」を再認識しました。

・「生かされている」ことへの感謝を忘れず、「生きることの意味」を探究し続けます。

・「わが使命」を再認識しました。

【おおくさ・ともこ／医師、福岡市】



これまでに聞いたことも見たこともない動物がうようよ暮らしていました。動物たちの声や動きが、これまで動物園でみたものとは大違いでした。動物たちがあるがままの行動、暮らし方、生き方に触れることがで

八代の魚

『人境考』に次の記載がある。

「鱸（スズキ）、鱒（マス）、鰯（ナヨシ）、江鮎（熊川前川ニ在リ沖ニテモ執、其外ノ小魚コト々々クアトリ々々ニ取之テ、近里遠郷ニ商々ス、隣国ヨリ求メニ来ルモノ多シ、鮎ヲ切江豚ニシテ江戸・京ニ贈リ物トス、俳師重頼、当国名物ノ部ニ入ルハ此処ノ鮎ノ事ナリ、又氷川川ヨリモ鮎出ル、風味優レタリ、中宮川ニモ鮎タツナリ、同切×・塩引・切漬・鮎外漁父網ヲ引テ之ヲトリ商々ス

等二用）（×は不明字）

この記載から、①江戸時代の代表的な魚の名前、②鮎のウルカの贈答品化、③塩づけによる鮎の保存、④鮎寿司の存在を確認できる。

文中の「俳師重頼」は、松江重頼のこと。通称大文字屋治右衛門。慶長7年（1602）〜万治3年（1660）。京都の商人。連歌を里村昌啄に学んだ。（春秋）

（春秋）

鱸（セイゴ） 是モ求廣川ニ在リ、漁父小鮎ハ春小網ニテクミ、夏秋ハ舟ヨリ歩ヨリトリ々々ニ取之テ、近里遠郷ニ商々ス、隣国ヨリ求メニ来ルモノ多シ、鮎ヲ切江豚ニシテ江戸・京ニ贈リ物トス、俳師重頼、当国名物ノ部ニ入ルハ此処ノ鮎ノ事ナリ、又氷川川ヨリモ鮎出ル、風味優レタリ、中宮川ニモ鮎タツナリ、同切×・塩引・切漬・鮎



スズキ



マス



ナヨシ（ボラの幼魚）



鮎のウルカ

塩の話

上村雄一

八代を支配していた松井家（細川家筆頭家老の家）の文章に次の記録がある。

明和九年（一七七二年）、伊勢国津之町若佛と申所から、甚蔵という九才の少年が八代塩屋町をたずねてきた。甚蔵の杖には「肥後八代塩屋新町」と彫つてあった。

町役人の立会のもと塩屋町の者たちは事情を調べた。甚蔵は母のほか四人と諸国を回っていたが途中で同行の者と離散し、甚蔵と母は伊勢国津之町若佛に数年に渡り逗留するにいたつた。しかし、母が大病を患い、甚蔵の出生地と彼の父の名前を地元の者に遺した。地元の者は路銀を集め甚蔵の襟元に縫い込ませ書付を持たせた。甚蔵は「八代塩屋新町」という名前を頼りに、道中、さまざまな人に助けられながら八代に到着したが、塩屋町の者で甚蔵の父・甚平を知る



「塩浜図」。江戸末期（19世紀）の矢野派の作。この絵で描かれている風景は、甚蔵の時代から100年近く後の景色である。右側の小高い丘は高島で、すでに陸とつながっている。海上には産島、三つ島、白島が見える。甚蔵はこれとちがった景観をみたであろう。しかし、その仕事は図に示されたものと同じであったろう。海水を砂に撒いて塩分を濃くし、それを釜で煮て水分を蒸発させる方法（「入浜塩田法」）で、この図には、堤防で外部の海からさげぎった土地（浜地）に、樋門から海水を取り込み、それを汲み、桶で運んだり、砂を集めたりしている人々が描かれている。遠くの小屋では塩釜の煙があがっている。江戸中期の文献『入境考』は、「城西ノ浜ニ塩ヲ煮ル、数百軒並居テ此ノ職ヲナス、此処ヲ塩屋ト名ク」と説明している。（八代市立博物館未来の森のミュージアム所蔵）

者はいなかった。そのようななか、塩屋町清三郎より、子供がいないので甚蔵を引き取り、塩浜干業を継がせたい旨の願いが役所にだされた。役所は願いを認めた。甚蔵のその後の人生は知られていない。九歳になってい

たから、すぐに塩浜干（製塩業）に従事したのであろう。

塩屋町の塩は松井家支配地のほか、人吉球磨地方などに

運ばれた。そのなかには甚蔵がつくった塩も含まれていた

かもしれないが、彼の塩を購入した者が甚蔵の人生を知る

ことはなかったにちがいない。

最近では生産者の名前を記す例が増え、それが商品の信用を保証する役割を果たしているが、それは例外である。通常は、物をつくった者の名前を記すことなく、商品一般として、生産物は社会に流通していく。大量消費社会の現在、その傾向はいつそう強くなっていて、生産者に注目する者はそれほど多くない。注目しようにも、生産者の人生が商品に投影されるはずもなく、その投下労働が商品価格として現れるだけであって、すべては数字に抽象化されて。生産者の人格と人生は捨象・切り捨てられる。マルクスは、それを「労働の疎外」とみた。

「疎外（Entfremdung）。むしろかしい言葉だが、ひらべつたくいえば、自己のものが自己のものでなくなり、自己と



細川家お倉事務所跡（八代市鏡町塩浜）。この地域一帯は現在は農地であるが、以前は、塩をつくっていた。写真は塩を貯蓄する倉庫跡である。この倉庫跡近くのみなさんから以前、同地が製塩する場所であったと教えていただいた



宮本常一著『塩の道』
（講談社学術文庫 / 3/6）

宮本常一著『塩の道』
（講談社学術文庫 / 3/6）
宮本・前掲書）

は無関係なものへと変質・遠ざかっていく、造った者と造られた物とが分離されていく現象のことで、商品経済では、普通にみられる状況だが、マルクスはそこに労働の現実の隠蔽を感じ、それを批判的にみた。

「塩」。人間の生存にとって不可欠な存在である。その塩を確保するために人々はさまざまなに努力してきた。宮本常一の『塩の道』はそれに注目した作品で、人間の故郷は生存に不可欠な物質の生産地はどこであるか、その地はその者たちがその生存を最終的に保証する地であり、「本当のふるさと」とあるという単純な事実を確認したのであった。

どこの塩でもよいというわけではなく、確実に確保できる地の塩でなければならなかった。塩をつくるためには大量の木材・薪を必要にするが、山の人はその材木・薪を本当の故郷に送り、その塩を得ようとした、たとえば宮崎

八代市坂本町鮎尾地区の場合は八代市二見地区であった(亀田宏子「伝統の食材・かずら豆腐」本誌7号36頁参照)。

塩浜干の従事者は身分的には百姓で、その仕事は決して楽ではなかった。塩は問屋(商人)を通じて各地に流通した。たとえば船乗りがそれを運んだ。船乗りも百姓であった。船乗りの百姓と問屋(商人)の利益は対立し、船乗りたちは塩を直接に仕入れ売ろうとした。「船乗りの塩売り」という。

八代塩屋と鏡塩屋の製塩方法はちがったというが、両者のちがいを十分に確認しきれていない。先日、鏡町の干拓地を調べにいったさい、地元農家の人はその土地について以前は、塩を造っていた場所であると教えていただいた。いつまでであろうか。調べれば分かるだろうが、そのように自然に説明なさったので、それほど遠い昔のことではないであろう。

【うえむら・ゆういち／本誌編集主幹】

外来語から学ぶ英単語 (31) …… 藤原 宏

カフェ・カフェ・カフェテリア・カフェテラス・カフェイン cafe caffe cafeteria cafeterrasse caffein

フランス語「cafe (カフェ)、コーヒー」の関連語です。「cafe au lait (カフェオレ)、牛乳入りコーヒー」「cafe noir (カフェノール)、ブラックコーヒー」「cafe a la creme (カフェ アラ クレーム)、クリーム入りコーヒー」「cafe royal (カフェロワイヤル)、王侯風のコーヒー)。

次はイタリア語「caffe (カフェ)、コーヒー」の関連語です。「caffe espresso (カフェエスプレッソ)、熱い蒸気で急速に濃液を抽出するもの」「caffe napoletano (カフェナポリターノ)、薄切りレモンの入ったコーヒー)。

cafeteria (カフェテリア) はスペイン語からの借用で、大学や会社などにあるセルフサービス形式の食堂のことです。似たことばに cafeterrasse (カフェテラス) がありますが、これは「cafe + terrasse (張り出し)」の意の和製フランス語で、歩道に張り出している野店のレストランのことです。

茶の葉やコーヒーの実に含まれていて興奮剤や強心剤として効用がある caffein (カフェイン) も cafe からの派生語です。

(398)

「老いらん」道中 ⑦

「元気に暮らす読者の秘術」



知恵と根性で

高橋昭三 (70歳)

去年の12月に何事もなかつたと思つたら、同級生からメールちゅうとが来て同級生が死んだげんと、通夜と葬式の連絡があり、「こら12月の最後の除夜の鐘まで油断できんばい」と気合いを入れて通夜に行つたら、同級生の連中が「おまや元氣のごたんね。おどんが同級生の仲間じゃおまえが一番候補になつとつとばい」と言われ、「なんの候補や」と言つと、「うつ死ぬ順番たい」。

おんもさすがに喜んじゃおられんばいと思ひ、そん日からタバコばすつたばりやめたが、今度は口が寂しゅうなつて、いわみ饅頭屋に毎日饅頭が恋しゅうて食つとつたら今頃、糖尿病の心配になつておつとたい。70歳になれば、あと10年。80歳まで生きとればよかて今頃思うばつてん。80歳過ぎん人は、あと10年で欲ば出しよつとたい。長生きして身内に迷惑がられ、近所の人に「いつまで生きとつと」たまにや「まあだ生きといやつとなあ」と言われ、本人は耳が聞こえん、目が見えん。なんか人

の言わす事が自分を褒めてくれよつと思つてニコニコなつとつとたい。

そぎやん言えば、通夜ん時、一番最後尾に座つとつたら同級生やつとんが頭のコツパゲばかりで光を放つており、自分の後方には誰もおらんし、眩しかとば見て通夜席で笑つとつたたい。あと10年、最後の人生崖ぶちに立ち、鶴翼の陣でふんばる…。

どうせ目・耳・歯・魔裸も使ひもんにならん。せめて知恵と根性で、身体と頭にムチ打つて長生きせんばんたい。とこつて、現代語で言う認知症になつて徘徊し、体力をつけて何もかも忘れて食い物にも不自由せず余生を過ごす。これがワシの健康法たい。まあ現代の水戸黄門のごたつたたい。

【たかはし・しょうぞう／人吉市】

文化団体との交流



「週刊ひとよし」の創刊号。(平成9年9月9日発行) 詳細は前号参照

連載記事・評論・文芸もまた予測を遙かに上回り、貴重な資料の発掘に繋がった。

人吉中央出版社は「週刊ひとよし」を編集発刊しながらも、自費出版を事業の一つの柱と設定し、可能な限りの「少量・少費の自費出版」を推進した。主な作品としては、『相良三十三観音スケッチ巡礼』（坂本福治著）、『救国・聖断の史』（川越重男著）、『人吉球磨の絵画の美術館』（三原竹二編著）、『球磨人吉の墓碑銘』（益田啓三著）、『人吉温泉旅館のための経営の基礎知識』（佐々木脩著）、『茸山騒動異聞』（渋谷敦著）、『相良三十三観音巡礼』（岐部明廣著）などがそれである。

このほか、学校関係の記念誌や『小中学生詩集・やまぎり』、文化鑑賞四団体（人吉労音・こども劇場・市民劇場・映画文化協会）の記念誌、ひとよし子ども園、ひまわり保育園などの卒業文集を多く手がけてきた。また、自社出版としては、『球磨の地名』（上村重次著）を始め、『球磨人吉郷土史年表』（永野傳藏編）、前田二洋文・上中満五郎絵の『ふるさと絵本・じゃった、じゃったー』などを刊行している。

特集 ジャーナリスト伊勢戸明②

特集

本誌の前身である「週刊ひとよし」は、創刊目的である「地域の真の自立」を編集方針に徹した。より開かれた読者参加をめざし、執筆者・寄稿者の普遍的拡大に特に留意し、時に応じて人吉球磨総合研究会運営委員との懇談会を開催した。人吉球磨総合研究会とは伊勢戸が呼びかけて、創刊の前年に設立した人吉球磨地域の文化関係者の集まりである。創刊の10年後には、延べ300名の執筆者を数え、

「週刊ひとよし」から「くまがわ春秋」へ

東 慶治郎

一、プロローグ

一九九七年（平成九年）九月九日、「週刊ひとよし」が創刊号として発行された。それから十八年、「くまがわ春秋」と名称は変わり、週刊ではなく月刊に形は変わっても、一度の休みもなく発行され続けて、二〇一八年（平成三〇年）九月九日をもって二十一年目を迎えた。

調査取材、執筆・編集、出版などなどにかかるエネルギーを考えると、関係された人々、特に中心におられた人たちの努力に敬意の念を抱く。

「週刊ひとよし」の創刊号に「創刊の日に平成九年九月九日の三つを選んだのは、重陽の賀にあやかるとい

より、三重苦にも耐えてみせようとの、いささか向こう見ずの気負いがあったること」とありますが、アンジェリーク平安閣での出版記念祝賀会での同様の挨拶をされた伊勢戸明さんのことを思い出しながら、本当に、その三重苦を乗り越えて、本当は四重苦、五重苦もあったであろうと想像しつつ、二十一年間をご苦労様、おめでとうございませうと、声を大にして言いたいと思います。

整理の苦手な私は、残念ながら創刊号は持っていないのですが、第三号を紐解くと、表紙の題字が吉村伯舟氏、写真が猪口六郎氏、コラム「くま春秋」はもちろん、伊勢戸さんである。時々、原稿を書かせていただいた「急流エッセイ」には、梅山究さんの名前もある。「映画を読む」には、懐かしい宮原茂富さん。画家の西峯多木次氏の絵画展の案内が写真入りで掲載されている。現在も活躍中の益田啓三氏、前田一洋氏、上田精一氏の各人の文章が、写真が、当時を思い出させる。他にもお名前前は聞くも面識のないまま過ごして来た人も多々である。

二十二年間という時間は、ある意味では残酷である。ほとんどの人はが向こうの世界へ旅立たれている。創刊号発刊の頃だったと思うが、

事務所の隣の建物の二階で聞いた、伊勢戸さんと猪口六郎氏の言葉が印象的であった。それから間もなく猪口氏は旅立たれるのであるが、「俺は一生、何をしてきたのだろうか」と猪口氏。伊勢戸さんは「立派な写真を残してきたでしょう。俺こそ何をやったのか」と。正確ではないが、たぶんそんな意味の言葉であった。



宮原茂富さんの「映画を読む」は、創刊号から260号まで長期にわたり連載された

「映画を読む」の宮原茂富さんとは、一月のまだ寒い日であったが、私の米で造ったマイ焼酎を、宮原さんのご自宅で飲むことになった。一緒に飲もうと招待していただいたのである。同席をお願いしたのは熊日新聞社の荒木直直さん。茂富さんの「こだわり」かたを知ったのはこの時である。肴はあぶったイカならぬ七輪で焼いたメザ

シと、征子奥様収集の古風な皿に盛った葱っぱいの冷や奴。他にもあったかも知れないが、映画のビデオが所狭しと並んでいた部屋でいただいた。話題は映画。板東妻三郎主演の雨の降る映画「おろち」を観ながらの、話と焼酎と肴は、この時間の流れは人生の至福の時だった。上田精一氏も体調の悪いなか、途中ではあったが合流されたことも印象深かった。

梅山究さんは川辺川ダム建設反対運動時の川辺川水訴訟の原告団团长である。川辺川建設反対運動の産声は、人吉市民から上がった。そしてその声は地元人吉球磨以外の八代、熊本、福岡、東京へと広がり、まるで雨後の筍のように、いろいろな組織が出来ていくのだった。

私も一市民として参加した。私は農家という立場から、治水問題より

利水問題へと活動の場を移した。そして出会った梅山節が「ダム問題の本質は利水である」、「裁判で勝つこと以外にダムを中止させることはできない」と。

創刊のことを振り返ると、「週刊ひとよし」を通していろいろなことを思い出す。またその当時、事務所を訪れると両側の棚、中央のテーブルの上と、資料が一杯の部屋で、皆さんがパソコンにとらめっこ。奥の部屋では輪転機が大きな音で遠慮無く回っていた。そして「こんにちは」と挨拶すると、皆さんの視線が一瞬玄関に集まった。入口正面の事務用の机には若い佐々木一生君と紅一点の中村小巻さんがいて、この二人のやりとりが面白かつた。

二、川辺川ダム問題と「週刊ひとよし」

伊勢戸明著『くま春秋』を初めて開いた時、前田一洋先生の序文「あくなき平和の希求の人」と、娘さんである深瀬(伊勢戸)まゆみさんの「あとかぎにかえて——よそものを受け入れてくれた人吉球磨」の文章に出会う。どちらも伊勢戸さんの考え、立場の本質を言い得て、素晴らしい文章であった。

驚いたことは、不当判決の一文を掲

くま春秋

人吉、球磨をつらつらと



伊勢戸明

げる後に熊本県知事選へ立候補することになる寺内弁護士と私の写真が、一九九七〜二〇〇〇年の最初の頁に、また二〇〇一〜二〇〇五年には川辺川水訴訟で勝訴確定を喜んでいる原告団团长の梅山究さんが、また別冊の『伊勢戸明、人と仕事』の高橋ユリカ氏の追悼文には「いさぶろうしんべい号」の窓側に向かいあって微笑んでおられる重松隆敏さんと伊勢戸さんの姿が掲載されていた。

この三枚の写真に出会った私は、あの時代、たしかに、あの運動の真つ只中にいたのだった。三枚の写真は、そのことを思い出させた。

伊勢戸さんは書く。二〇〇〇年九月三日、「川辺川水訴訟」というタイトル。「川辺川水訴訟の判決が目前に迫った。平成八年六月から今年の三月十日まで、三年九ヶ月にわたって

の裁判の経過を見る限り、よもや原告の敗訴ということはなく、被告である国の敗訴、つまり利水事業の不当性が立証されるに違いない。というのが、大方の推測だが万が一ということがないとは言えないのが裁判である」と。

そして万が一が発生し、司法への抗議の一文「及び腰司法」を、二〇〇〇年九月十七日に書く。「といえ、いかにも原告、農民の肩を持ちすぎると言われそうだが、その程度の「及び腰司法」であることを今、声高にしておかないと、日本の司法は三権分立を三権不介入と同義にしてしまふ」と。

あの時、裁判官が「瑕疵があったとしても裁量権の範囲で濫用は無い」と言ったこと。団長の梅山さんが「裁量権を持ち出したか」と、つぶやいたこと、弁護団団長の板井優^{（おの）}弁護士は「司

法の自殺だ」と批判されたことが言葉として残る。

熊本地裁の判決を聞く前、部屋の原告団の小さなテーブルの上に、勝訴の時、敗訴の時は、これをと、打合せをして置いた。原告側が却下されゆく裁判官の声を聞く。敗訴である。団長の梅山さんが言い続けた「負ける理由はない」という言葉を信じ、また事実、運動の中になると、農家の人達の反応から敗訴はないと固く信じていたのだが、みごとに裏切られた。

寺内弁護士と共に、敗訴用の「不当判決」を持つて走り出た。多くの仲間、応援していただいた人々、マスコミの方々への結果の報告であった。

この裁判に入る前のことも思い出す。人吉市瓦屋町にあった川辺川利水事務所へ、利水の説明を聞きに行っ

た時、梅山さんが「これは人吉球磨の歴史、開闢^{（かいびやく）}以来の事件であります」と報道陣に吠えた事。正式に「お上」に物申したことがない土地柄と後で気付くまで意味が解らなかつた。異議申し立ての数は一四三名だったと思う。申し立てはすぐに却下された。口頭審理もした。

その後、裁判は福岡高裁へと闘いの場を移す。東京から帰る時、弁護士森さんより「弁護士団は三本の柱で闘いを進める」と聞いた。三本の柱の一つが、一審の時にも約半分の二千戸の農家の意向調査をしたが今回は、対象農家全部の約四千戸を二戸残らず調査するという「アタック2001作戦」の実行である。そして、これが決め手となり、三分の二以上の同意が無いことが証明され、高裁での勝利となり、法的に多目的ダム法の一角を

崩すのである。

コラム集『くま春秋』では、「利水訴訟の農民勝訴」と題し、「川辺川利水訴訟の福岡高裁判決で『農民勝訴』が確定した。当然のことながら国（農水省）は、川辺川利水事業の変更を余儀なくされ、おそらくは抜本的な規模縮小を迫ら



川辺川利水訴訟で原告敗訴の判決
(2000年9月8日、熊本地裁)

れることになる。合わせて利水を治水とならぶ目的とした川辺川ダム計画自体も見直さざるを得なくなる」と。「何たつて農民は強い。したたかだ。たとえばあの成田闘争だ。国が総力を挙げてでもビクともしない。食を賄う基盤である土地（実）を持つているからだ。ひきかえ都市型住民は脆い。生活の基盤を実体のない金（虚）に依拠し、一人では生きられないからだ」と、著名な学者の言葉を引用したコラムとなる。

そしてダム問題は、球磨川漁協内の漁業権への闘いに移り、漁業内でも三分の二以上の同意が得られず、買収も出来なくなる。

住民討論集があり、住民投票の問題があり、あり、ありの目が回り続けた時間であった。

最後には相良村長、人吉市市長が

白紙撤回を表明。熊本県知事も見直しを表明され、とうとう川辺川ダム建設は、付帯工事がほぼ完了したまま、ダム本体工事は凍結となった。

この間、「週刊ひとよし」にはダム建設反対の立場から多くの論陣を張る文章を掲載していただいた。本当にありがたいと思つた。

目的を達した今、あの頃を思い、振り返る時、本当に奇跡的な市民運動であったと強く強く感じる。

誰が功労者というわけでもなく、この運動に参加された方々、応援をしていただいた多くの方々を含め、その総意がエネルギーとなり、住民の真からの同意なしに進められようとした国策公共事業を見直しさせたものと思うのです。そういう意味で勝利宣言集会にて最大の功労者が「知事」と紹介されたことには違和感を抱き続

けてきました。最大の住民の応援者だったと紹介すべきだったのではないかと今でも思っています。「週刊ひとよし」は、そういう意味で市民運動の最高の応援者だったと思います。

三、エピソード

創刊の頃のこと、川辺川ダム反対運動時のことに焦点を当てて思いを綴りました。多くの分野のことを記事にしてきたのが「週刊ひとよし」と「くまがわ春秋」だったことも熟知の上です。

山々を含む球磨川流域、球磨川が流れ込む不知火海の漁が現在、自然豊かとは、とつてい思えません。またそこに住む人々が、経済的に豊かとは、「くまがわ春秋」で紹介されたこの地域の所得を考えると、とつてい言えま

せん。

その中で未来を創り出すことは困難かもしれないが、衆知を集め、知恵を集めた月刊誌として成長してゆくことを期待しているところです。

二十周年にあたり思い出したことを書いてみました。

最後に深瀬まゆみさんの一文を紹介いたします。

「晩年の父には、この地にローカル・ジャーナリズムを定着させた自負がわずかばかりあったかもしれないが、それを受け止める優れた読者がいたからこそ実現した、ということを決して忘れてはいなかった」

父とは、伊勢戸明さんのことです。

【ひがし・けいじろう／農業、人吉市】

人吉中央出版社の刊行物



伊勢戸さんの思い出

伊勢戸明さん、懐かしい名前である。その名は、私の少々くたびれた脳裡には深く刻み込まれた名前と面影である。彼との出会いは、昭和30年代半ば、半世紀以上も前に遡る。

大日本帝国憲法の基に強行されてきた天皇主権の軍国主義は、敗戦によって崩壊し、新憲法の基に各々の職場には、民主主義を謳歌するように労働組合が結成され、その労働組合は働く者の権利を主張しながら自らの生活を守り、働

立山勝徳

く皆の幸せを願って泥臭くも生き生きとした活動が展開されていた時代であった。

私は昭和20年代の半ば、国鉄労働組合人吉支部の青年部長、組合事務所は駒井田町にある屋森床屋の前の市道と御溝川の間側側建てた一軒家。事務所のスペースも広がったので、人吉球磨にある総評系労働組合で組織した「人吉球磨地区労働組合協議会」、略称「地区労」の事務所も同居して事務所を構えていた。

当時の地区労働運動の中心は、公労協部隊と言われた国労、動労全通、全電通、全林野、全専売や県教組、民間では全日通などであったと思う。従って人吉球磨における労働運動や革新的な住民運動の様子はここに来れば良く分かった。

その頃、青井神社の後ろに社屋を構えた新進気鋭のローカル紙「人吉新聞」の創始者である石蔵初代社長と相棒の伊勢戸明さんが毎日立ち寄っていた。国労青年部長の私も、SL乗務の合間をみては話しており、当然、会う機会も多く、権力や財力に臆することはない公平中立なローカル紙づくりに情熱を燃やす伊勢戸さんに惹かれ、いろいろと話をするようになった。

当時、地区労に加盟する各労働

組合には青年部や婦人部が結成されてきたが、連合体である地区労にはまだなかった。そこで同志が集まり地区労青年婦人部を結成しようとなつて加盟組合の青年部と相談しながら人吉球磨地区労青年婦人部が誕生した。

その青年婦人部の中でメーデー前夜祭を大々的にやろうと盛り上がり、人吉大橋のもとにあった市民会館で開催することになったが、出来たての青年婦人部には予算がない。そこで親執行部に予算をつけてほしいと申し出たら、お前達が勝手に決めたんだから自分達でやれと一蹴された。血気にはやる若者達は、ならば頼らんで自分達だけでやると意気込み、4月30日の前夜祭を迎

えた。

開会挨拶なども終わり、会場では各組合青年婦人部からの演し物、歌あり、踊りあり、コントありで盛り上がり上がっていた時、受付からすぐ来いと連絡があり、駆け付けてみると親執行部の議長、副議長などが気色ばんで立っておられ、なんで親執行部に案内もなく、挨拶もさせんとか？との剣幕である。私達も「勝手にやれと言われたから、勝手にやっただけ」と反論。ついに地区労議長の挨拶を受けることもなく、対立したまま、初のメーデー前夜祭は盛会に終わった。この一部始終を見ていたのが伊勢戸さんで、大変心配してもらって数日後、「親執行部と仲直りせんと、今からの地区労運動に支障があるバイ。俺が取り

持つから仲直り懇親会ばやんない」と仲介役を買ってもらった。

数日後、親執行部と青年婦人執行部の懇親会を当時大変賑わっていた笹屋で開催して打ち解けた。当時の地区労議長は、全通出身の初田勇さん。やかましかったが磊落な人柄だったので無事、和解。以後メーデー前夜祭は、人吉球磨地区労青年婦人部の一大イベントとして定着していった。

あの時、伊勢戸さんが仲介役をやってくれなかったら、どうなっていただろう。今も思い出すコマである。

【たてやま・かつのり／人吉鉄道
観光案内人】

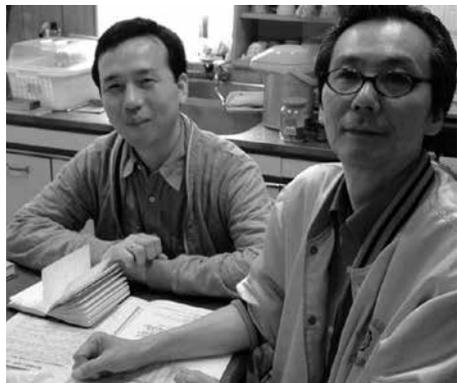
生きた雑誌・生きたネットワーク

興野康也

雑誌作りに関わることは僕は10代からありましたが、何を目指していたかばいいのかはよくわかりませんでした。「理想の雑誌」と言えるものに出合ったことがなく、自分なりの目標を持てなかつたのです。そんな僕に「生きた雑誌」との出合いがありました。『週刊ひとよし』です。

『週刊ひとよし』は地域の平均的な人たちの文章を集めたものではなく、地域変革への情熱を持った人たちのサークルといった印象がありました。ですが単に偏っているだけで

なく、そこには思想以前に強い地域愛があるように感じられました。だからこそ読者の方々に受け入れられ



2012年5月、週刊ひとよし時代の松本さんと私（左）

たのだと思いますし、地域愛という強い気持ちを持ったことがなかった僕にとつても魅力的だったのです。

僕の書いたものなから、『週刊ひとよし』に掲載する記事をまとめてくださっていたのが編集者の松本さんでした。松本さんは多くを語る人ではなく、すぐ目立つ方でもありません。ですが淡々とした雰囲気の中には、やはり強い芯のようなものがあると感じました。人吉球磨という小さいけど奥の深い地域を、さまざまな角度から照らし出し、味のある人を掘り起こしてみたい。いったいどこまで深いんだろう？松本さんが書き手に関わり文章作りを支える背景には、そんな信念や好奇心がある気がします。

『週刊ひとよし』を読むなかで、

記憶の落し穂

その ③〇

絵と文／坂本福治



里見勝蔵との接点

僕自身の気持ちも変わっていきました。目指すべきものは「理想の雑誌」ではなく、「生きた人の輪」なのです。文章の質が良いか悪いか以前に、そこには熱い心のつながりが必要ではない。そして少人数の核となる人たちのまわりに、多様な人たちの集まりがないといけない。いい雑誌以前に、いい集団がないといけないのでした。雑誌というのは人々がつながれる「広場」の1つの形に過ぎないのです。

どんなにすばらしい書き手がいても、1人では雑誌はできません。おそらくいろいろな個性を持った人たちが、たくさん集まらないと、雑誌は作れないのです。ですから雑誌を作ることは、結果的に地域を育てます。いろいろな分野で活動する人たちを励まし、仕事を深めることを助けるからです。そして画一的な生き方ではなく、風変わりだったり偏っていたりする生き方の人にも、優しくエールを送るのです。

僕是人吉球磨に住んで15年目になります。その間に結婚して子どもが3人生まれました。自分の生活は変わりましたが、変わらないのは「人とのつながりを作りたい気持ち」です。僕自身は精神科医としての支援活動を通して、地域ネットワークを育てていきたいと思っています。保健師、社会福祉士、行政、教育、ヴォランティアなど、地域の支援職と協力してこそ、困難事例が解決していきます。子ども支援から高齢者支援まで、困難事例対応チームがすぐに作れるような地域

【おきの・やすなり／精神科医、人吉市】

私の美術研究所時代、須田國太郎展を見て深く感動した。高名な里見勝蔵が講演したので聴いた。須田を評価するものと思っていたら、「会員には私が推したのだ」とか、「恩知らずだ」とかの話。後味が悪く、里見氏に手紙を出したら、「遊びに来なさい」との返信。恐る恐る鎌倉山を訪ねた。ところが、須田の話は全く出ず。里見氏はフランスでブラマンクに出会い、強く影響を受けている。「構図法なんか学ばんでいい」と言われたらしい。何十年後、ブラマンクに会い、「それを信じていたので一生苦労した」と言ったら、ブラマンクが「申し訳ない」と謝ったそうである。私が師事する画家について、荻野康児と答えたら、「あの荻野がいかんのだなあ」と言われた。心をこめて言われたのは、「アングルを模写しなさい」だった。里見氏の画風からして、意外な助言だった。口数少ない奥さんから、二枚のコースターを頂いて帰った。大事にしていたが、今は不明。

【おかもと・ふくじ／画家、人吉市】

この二十年の変化

桑原史佳

十年ひと昔と言われるが、あまりにも目まぐるしく変化する環境特に情報は溢れんばかりで、田舎にいても都会と同様に手に入る。

二十年前の人の生活や考え方をしてコミュニケーションが、現在とどう変化したかを知りたく思い、親と子の関わりについて二十年以上のキャリアを持つ球磨人吉在住の十名と、当時の保育園児から高校生名の九名に尋ねてみた。歳月の差を、昔と今という言葉で表現する。

昔は「たまごっち」「ゲームボーイ」

も少ない。コミュニケーションも薄くなってきた。

保護者名を記入するとき、昔は父親の名前を記入してあったが、シングルでなくても母親名のほうが多くなった。また子どもが両親の名前を発表するとき、昔は父親から言うていたが、母親の名前からいう子が多くなっている。父親の威厳が薄れてきたのか、母親が強くなってきたのか。地震雷火事親父の時代は何処へ。

昔の球磨人吉の静寂で真つ暗な夜に、登場し始めたコンビニ。今、国道沿いには結構な数のコンビニが24時間オープンで立ち並び、夜遅く親子を見かけることもある。昔の食事やおやつは手作りが多かったが、

などのゲーム機の出始めの頃で、この9月に引退した安室奈美恵さんの大ヒット曲「Can you celebrate?」が日本レコード大賞を受賞し、紅白では二年連続でこの歌が歌われた頃だ。

小学生は、日記や手紙やシールを交換したりして楽しみ、中学校生はプリクラで写真を撮ったり、昨夜見たテレビの話題で盛り上がるなど、今も変わらぬ姿だった。卒業が近づくと、将来について親や祖父母の意見を参考にしながら、進路

今や店には総菜やデザートが種類豊富にそろっているので、買っている人が多いようだ。毎日が、やめたくてもやめられないコンビニ通い依存症の人もいると聞いている。

学校から帰ったら、夜はご飯をす

を決める子どもが多かったが、今は自分の好きなことの目標に向かって進む子どもが多くなった。夢にたどり着くまで頑張りぬく努力と根性は持ち合わせていけばよいが…。

子育ては、育児やしつけ・病氣など、昔は親や近所の人、友達に聞いたり、勉強会で情報を得ていた。親が子どもを叱り、よいこと悪いことを教えていた。今は親と子どもが対等の立場、幼い子どもが親を叱る姿も見られる。叱り方、ほめ方を知らない親が増えたような。スマホの鬼のアプリで泣く子を黙らせようとする親がいるというのは都会だけの話ではない。今はスマホを使用して情報を得られる時代となったので、育児の勉強会など参加はとて

ませ、家族でテレビを見たり、トラップをしたりして過ごしていたが、今は、夜遅くまでスポーツやダンスの習い事をしている子や、夜遅くまで部屋でゲームをしている子、親中心で夜遅くまで子どもを連れて出かけたりの生活も増えているようだ。睡眠に入る時間が遅くなり、朝起きれない。朝ごはんも食わずに保育園や学校へ行き、午前中はぼーっとして過ごす。夕方になると、目が冴えてくる。悪循環が習慣として身についてしまっ。

テレビドラマも変わった。TVアニメは「サザエさん」「ちびまるこちゃん」などアットホーム系だったが、今は、要素の違うもの「進撃の巨人」などが人気のようだ。



ゲームはパクパクモンスターなど、点数を上げていくだけのシンプルなものだったが、今は知らない人と繋がって、人を殺していくようなゲームもあるらしい。画面もリアルすぎて怖い。また、集団の力で努力して苦しさを乗り越えて、喜びや達成感を共感するという内容のドラマが多かったが、今はいじめや暴力、家庭問題、医療ドラマなど、時代を反映し問題視されているものへと移り変わっている。

一番大きな変化は何といっても一人一台の携帯電話、インターネットの時代。子どもたちが遊びの中で電話をかける様子は昔も今も変わらないが、昔はダイヤル回す真似、そしてプッシュホン、今

は指スライドしたり、クリックしたり。おとなしくさせるために幼児にも与えて子守りをしてもらう。文字を読めないのにゲームやYouTubeなどいろんな機能やアプリを使いこなす我が子の姿に喜びを感じる親もいる。取り上げたらパニックになったという事例もこの地域で起きている。

昔は中学校の卒業式で証書をもろう舞台の上で、学生服の裏の刺繍をみんなに見せたり、窓ガラスを割って反抗心を表に出していた元氣な子やガキ大将みたいな子がいた。今は表面はおრიこうさんでも、SNSの書き込み等のいじめで陰湿なやり口が社会問題になっている。家庭では、愛情表現として物を与えることが多くなり、欲しいもの

は何でも手に入り、うれしいのは束の間。溢れる情報の中で欲しいものが次々と湧き出てくる。我慢ができずに大暴れする子どもたち。

この二十年で、人と人、親と子との関わりは大きく変遷した。これからの二十年、どうなっていくのだろう。

今世紀を迎えるときは「心の時代」と言われていたが、人と人の心が温かく繋がり、寄り添っていく、よりよき共助の時代に向かいますようにと願うばかりだ。

【くわはら・ふみか／福島保育園主任保育士、球磨郡錦町】

中里喜昭

『百姓の川』について

上村雄一

中里喜昭。1936年、長崎市生まれ。職業作家。

川辺川関係の資料を集めている人であれば、その名前を知っているだろう。文学に関心のある人も一度は名前を聞いたことがあるかもしれない。親子ほどに年齢が離れているため、私は「中里先生」と呼ぶのを常とする。ここでも、「先生」とさせていたたく。

私が川辺川問題に初めて接したのは先生を通じてであった。先生の著書『百姓の川』（2000年 新評論）を読



んで知ったのではなく、同書出版前に、先生が川辺川を取材なさっているときに知った。20年前であろうか。

長崎県の香焼島問題

など共通する問題にかかわっていたこともあって、30年以上前から先生には懇意にさせていただいている。作家の上野英信さん、日本共産党議長の宮本賢治さんなどについての幾分きな臭い話題だけでなく、中勘助『銀の匙』のおもしろさなどを酒の肴にしつつ、文学を中心に馬鹿話をさせていただいた。酔うと、先生は詠われた。抑揚のある美しい声であった。

その中里先生が、ある夜、「いま、川辺川を取材していただきます」と話された。そのときが川辺川問題を知った最初であった。当初、先生が川辺川をなぜ取材されているのか、不思議であった。話をうかがううちに、「公共事業」がいかに曲者であるか、地元の人々の反対運動がどうして正当性をもつのか、をしだいに知った。もちろん酒の場である。

川辺川問題の全体を知ったわけではない。『百姓の川』を出版なさったのち、その具体的内容を知るに至った。それでも、さほど川辺川問題に関心を寄せたわけではない。『百姓の川』は最初の一步にすぎなかった。その後、さまざまなお話を通じて、同問題を少しだけ知った。なにごとともそうであるように、影響力のある本がいつも基本書になる。

私の場合は『百姓の川』である。同書が出版されてから、

すでに、18年がすぎ状況は大きく変化した。だが、いまでも『百姓の川』を基礎に川辺川を考えてしまう。

中里先生と伊勢戸明さんが直接にお会いになったか分らない。しかしながら、中里先生が伊勢戸さんをご存知であることは確かだろう。「手渡す会」の当時の事務局長は故重松隆敏さんだが、伊勢戸明さんは重松さんの資料を作成していた（東慶次郎「重松隆敏さんを偲ぶ」本誌16号54頁）。重松さんは『百姓の川』の最重要人物である。その重松さんの背後にいた伊勢戸さんに気づかないわけがない。

相良村の緒方俊一郎先生も同じだ、緒方先生は川辺川問題の主役の一人であるだけでなく、伊勢戸さんが敬愛してやまなかった、故北御門二郎さんの近い親戚にほかならない。緒方先生を取材なさったとき北御門さんはもちろんのこと、伊勢戸さんのことも話題になったであろう。

『百姓の川』の内容を要約するつもりはない。川辺川は全国的问题で、先生だけがその問題に関わったわけではなく、その果たした役割も巨大であったというわけではなからう。それはさておき。先日、東慶次郎さんと中里先生について話す機会があった。「有名人」だけでなく、「多数

の無名の人たち」の存在を軽視してはならないと東さんは指摘なさった。そのとき伊勢戸明さんの周辺にいた人物として先生をとりあげる気になった。先生の名前に接して懐かしく感じる読者がいらっしやれば、それでいいと判断した。

しかし、それだけではない。私が「週刊ひとよし」を購読するきっかけになったことも先生の名前を出す理由である。『百姓の川』を通じて人吉の情報を知りたいと考えるようになり、同誌を購読しはじめたのだ。人吉球磨地方の基礎知識を収集するために同誌の購読をはじめた。

購読開始時、フェイスブックなどのネット媒体の利用は誰でも実行している状況になっていた。そうした媒体を通じて同誌・編集部と知り合いになり同誌に雑文を寄稿することになった。短文で十分であったので寄稿する機会がしだいに増え、現在に至った。『週刊ひとよし』さらに『月刊くまがわ春秋』にたどりついたのは中里先生にはじまる。先生は、ご健在である。久しぶりにお手紙を差し上げよう。

【つえむら・ゆういち／本誌編集主幹】

せきれい 鶴鴿短歌会

九月詠草

みずあびを夢二が描く色と艶はほえみ湧きし夏の夕暮れ
暮れ泥む早秋の風心地よく明日を知らずや啼く法師蟬

守永 和久

満月に柵田の畔の彼岸花灯明のごとく紅く光りて
ゼロイチで決められぬ事ある中に人工知能は勝手に走る

河内 徹夫

夫と行く旅はこの先あるのかと無難を願ひ杖の仕度を
見馴れたる「徐行」看板見えざるや若者たちは速度落さず

中村美喜子

汽車の旅地の果てまでに遙々と想い馳せたる根室の岬
若き日に北方領土に魅せられてノサップ岬ゆ遙かに望む

西 武喜

東南にひと際輝く星が出る「火星ちゃん」だと孫が教へる
彼岸花一本二本と咲き初めて球磨の盆地は観音参り

釜田 操

永年にわたり続けし老人の弁当作りにピリオドを打つ
カテーテル何回すれば終わるのか治療の苦しみいつまで続く

三原 光代

熱帯夜天空の星満ち満ちて涼を求めて吾流れゆく
立秋に吹く涼風は未だなく猛暑の名残り今なお続く

橋詰 了一

朝、昼、夕三度の食事に夜のお茶妻との会話も介護の日々に
生きている時間の重み思ふとき妻のひと日ひと日を祈る

堀田 英雄

倉敷便り

22

絵と文／原田 正史

倉敷市真備地区 大水害の真実

今夏の西日本を襲った豪雨（平成30年7月6日）によって甚大な被害を受けた倉敷市真備地区の実態について、同地区の地形・地質を直接観察出来た者として、見解を述べたいと思います。

真備地区は倉敷市の最北端に位置し、県下有数の大河である高梁川^{たかはし}が中国山地を流れ下り、ようやく山地から抜け出て平野部に達したその西岸側にあります。平野部といっ

ても完全な平坦地ではなく、周囲を低い丘陵に囲まれて西から東へ、即ち高梁川に向かって延びる窪地状の地形となっています。従って堤防が無かった昔は、雨期になると高梁川の水がこの窪地に流れ込んでいたに違いありません。このことは次のような事実によって理解出来ます。

この地域に古くから住んでいる人たちの家は、低い中央部には建てられておらず、周辺部の少し高い丘陵にありました。今回の水害でもその殆どが被害を受けることはありませんでした。昔の人たちは中央部を耕作地として利用し、雨期になると水

浸しになるのを当然のことながら良く知っており、ここに家を建てようとは考えなかったのです。結論的に言うならば真備地区の中央平坦部は本来、建造物の建造には不適格な土地であると断定できます。もし中央平坦部に家を建てるのであれば、事前に地盤の嵩上げが必要だったこととなります。これで水害を防止できる訳ですが、膨大な経費を必要とするこのような工事を民間であれば勿論のこと、行政であっても造成するはずがありません。そうであったとしても、この土地が建造物不適格地であることは、地形観察によって十分把握できる事から、住民の生命・財産を預かる行政としては、当然の責務として宅地造成を許可すべきではなかったと言わざるを得ません。

しかし、どの時点でこのような判断をするかは容易なことではないと思われれます。

真備地区と高梁川
(2018, 原田)



ここで明らかにしておかねばならぬ重大な事実は、高梁川をはじめとする平野部を流れる諸河川や、その支流に至るまで、すべて天床川^{てんじょうがわ}であることです。天床川とは、堤防が設置されている川の通常の水位が、まわりの地面より高い位置にあるものです。そして、この事が今回の真備地区水害の大きな要因の一つになっているのです。

明治時代に入って高梁川に堤防が築かれ、時代が進むにつれて行われた改修工事によって、より強固なものとなりました。これによって真備地区中央低地にも次第に住居が建造された訳ですが、市街地化されたのは安価な住宅地を求めた人たちが殺到しはじめた昭和50年以降のことだったようです。

この移住者の人たちに絶対的な安心感を与えたのは国によって建設された、両側に自動車道を持つ高くて幅広い高梁川河岸の堤防だったに違いありません。この強固な堤防が将来、バックウォーターと呼ばれる逆流現象の一因となる事など住民が知るはずもなかったのです。

ここで、真備地区と倉敷市中心街との位置関係について、触れておきたいと思います。中心街の真北に位置する真備地区は、中心街から直線距離で約5kmあり、その間は殆どが無人の地です。

真備地区の中央底部には周辺の丘陵地に降った雨水を支流を通して集めた小田川が、東西方向に流れて高梁川に流入しています。通常の降雨量の場合は支流の水位が高梁川よ

漢和字典は面白い

14
鶴上寛治

恋

永遠の課題——恋。90歳の男性と60歳の女性が結婚、と話題になったようだ。そう、当たり前でないからニュースになるのだ。恋に年齢は関係ない。

子どもどころ、この漢字を《いと》、いと、と言っ心《と》と覚えたもの。それはこの本字が「戀」だから。

似たような漢字に「桜」があった。《二階(貝)の女が気(木)にかかる》というもの。この字の本字が「櫻」だから、こういう遊び(学び)が成り立っていた。「恋」では《亦の心》でさっぱり味わいが無い。

泄

排泄以外にこの字は滅多に使われないが、漢和字典には「洩」が「泄」と同字だと書いてあり、ビックリ！意味は①もれる・あふれ出る・秘密などが露見する②お

こる③へる④まじえる⑤なれると続く。いや、第一

尿

ちょっと汚い話だが、「古事記」には《尿尿をふりまく》という犯罪行為が登場する。犯人は素戔嗚尊(スサノオノミコト)。重罪として高天原から追放される。尿はよく目にするが、

尿とは何？《人間の排泄物の中で尿ではない方》だ。漢字を生み出した古代中国人もどうやら米を食っていたらしい。

中世の古文書に牛屎院という地名が出て来る。今の大口地方(伊佐市)で、ウシクソインと読む。当該地方の民衆は何とも思わなかったのだろうか。屠・尻などもわかる。難しいのは「層」「履」「屈」「属」などだろうか？

義に《もれる》がくるとは意外。いや、むかしから男も女も、この「洩れに悩んでいたのか。排泄の「世」は「曳」に通じ、ひきのばすの意となる。

ある看護師さんにこの洩れる悩みを話したところ「出なくなる方がずっと苦しく、かつ危険ですよ。」と言われ安心した。【つるかみ・かんじ／人吉市】

りも高く、これまで何の問題もありませんでした。ところが今回の豪雨はすさまじく、高梁川の水位が支流の水位を越えてしまい、小田川や更には支流などにも流れ込むという逆転現象が生じてしまったのです。もとも小田川やその支流はすべてが天井川ですから、それぞれに見合う堤防が築かれていました。しかしいづれも高梁川堤防のような強固なものではなく、あちらこちらで逆流水が堤防を乗り越え、決壊させたのです。これによって中央底地一帯は、一気に水浸しとなり、貴重な生命財産が失われました。

真備地区に入りました。水没した中央底地の家々は水圧によるのか玄関などの戸はなく、脱出に利用されたとと思われる二階の窓はことごとく開けられたままでした。古くて小さな家は斜めに傾いて、今にも崩れそうであり、その傾きの流入水の動きを示すものと理解できます。新しい家のなかには補修工事が始まっているものもありますが、これは例外的なものであり、水没家屋のほとんどが無人であり、まさにゴーストタウンそのものであると言えます。そのような状況の中で繁昌していたのがコンビニと一店だけ開いていたスーパーと、ガソリンスタンドでした。お客は、復興工事の作業員たそうです。

中央低地を半円状に取り囲む丘陵基部の家だけであり、今後無人化した中央低地に、どれだけの人が帰ってくるのか、真備地区の復興を左右するカギであると言えるでしょう。やがて逆流現象を防止するため、小田川と高梁川との合流地点を少し下流に移動させる工事が始まります。しかし平野部に入ってから高梁川の流れは大変ゆるやかであり、多少の移動では水位差を広げることが不可能と思われる。逆転現象の解決にはならないでしょう。温暖化が進む現在の気象環境のなかでは、今回以上の豪雨になる可能性もあるのであって、抜本的な対応が求められるのです。

【はらだ・まさふみ／元人吉市文化財保護委員、倉敷市】

くまがわすじの考古地誌

(22)

球磨川筋の弥生時代²²

八洲開発株式会社 木崎文化財研究室長 木崎康弘

(NO.183)

「免田式」を使おう！⑧

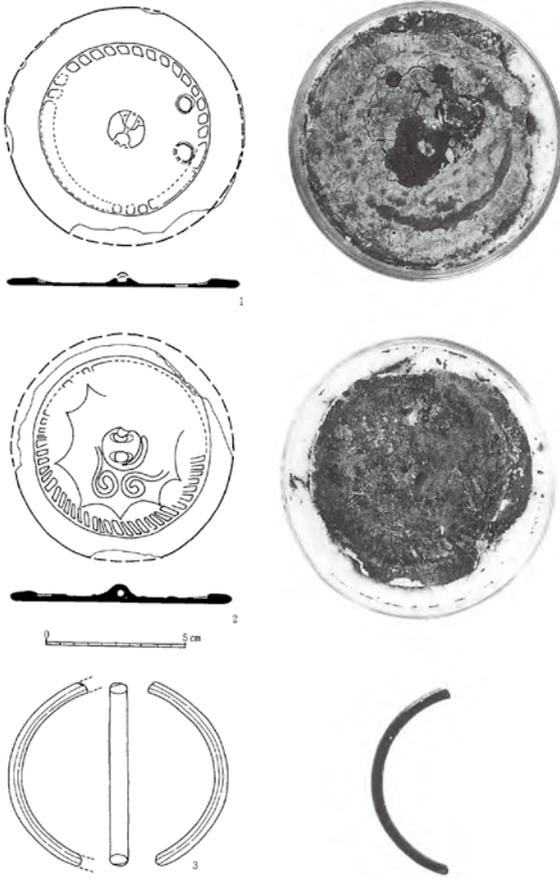
夏女遺跡、青銅器の話①

本誌第29号では、夏女遺跡の住居跡には、弥生時代のほかに古墳時代のものがあり、その頃には重弧文土器がムラの中から姿を消していたことを予察した。そして、「興味は尽きないが、そのことへの探求は後に回して、もう少し夏女遺跡の実像に迫ってみよう」と述べたことに関連して、ここでは青銅器にポイントを絞って紹介していこう。

夏女遺跡の発掘で特に注意を引いたのが、青銅器の出土だった(写真・図)。それは三点あった。一は、二三号住居跡で見つかった、直径八・〇センチメー

トルの小型内行花文鏡。二は、五〇号住居跡で見つかった、直径八・〇センチメートルの、同じ小型内行花文鏡の内行花文鏡。三は、六五号住居跡で見つかった、直径が内径で八・〇センチメートルの銅釧の破片。ちなみに、銅釧とは、青銅製の腕輪、プレスレットのことである。

この青銅器、業界用語では、青物、アオモノと呼ばれる。なぜかというとう、腐食すると表面全体が銅の錆、緑青で覆われるからで、特にアオモノはそれほど頻繁に見つかるものでもなく、とても珍しい、所謂珍品。奈良や福岡な



写真・図 夏女遺跡の青銅器

器を取り上げたことがあった。それは、『球磨の考古地誌』連載の『ある考古学者の誕生(二)』(本連載一四)と「続く、発見!大発見!!」(本連載二〇)で、多良木町黒肥地の槍掛松遺跡の細形銅釧を取り上げ、それがどのルートで球磨にもたらされたのかを考えた、その前段での概説でもあった。そこで、基礎知識をそこから抜き出していくことにしたい。

そもそも、青銅とは銅と錫の合金で、英語ではbronzeとスペルし、ブロンズと読む。ロダンの有名な「考える人」は、ブロンズ像で、青銅製の芸術作品。そんな有名どころではなくとも、県内や、球磨内でも結構ブロンズ像は立っている。それだけではない、財布の中に入っていないことのない一〇円銅貨も青銅製である。つまりとても馴

どの先進地域ではそうでもないようだが、熊本ではそうそう見つかるものでもない。そんなことで、掘り当てた考古学者を「当たり屋さん」と目する風潮まで出てくる、そんな品物なのだ。調査担当者だった園村辰実は、そんな青物を夏女遺跡で、二年連続で掘り当

てたのだから、当時、「当たり屋、園村」と呼ばれることも多かった。

そこで、本題に入る前に、青銅器の一般基礎知識から、入ることにしたい。

前連載であった「球磨の考古地誌Ⅱ」の第一五九号に、「中期、青銅器登場の背景」というテーマで青銅

染みの深い金属なのである。そして、それを材料にして作られた利器や容器を青銅器と呼んでいるのである。

銅器よりも硬く、農具や武器での利用でも明らかに勝っていた。こうしたことから、その利用が急速に広がっていったのだが、世界史でも習ったことがあるように、冶金技術の、抑々の発明者は、紀元前四〇〇〇年頃の、メソポタミア文明初期の主人公、シュメール人たちがだった。その後、その有用性から、製品や生産技術が他の古代文明に積極的に受け入れられていった。石器時代に続く新たな時代としての青銅器時代が画されるようになったのは、そうした背景からだった。

東アジアでの様子は、中国文明がいち早く製品を受け入れて、利用を始めたというものだった。それは、紀元前三〇〇〇年頃のことと考えられ、紀元

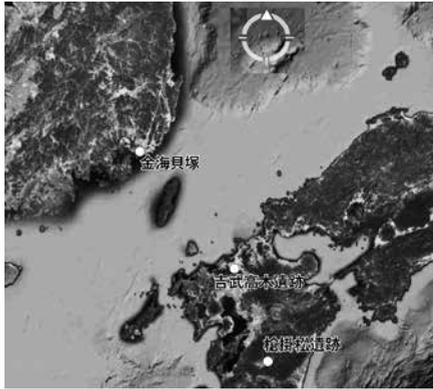


図 東アジアの中にある球磨 (槍掛松遺跡)

年度の発掘の時、墓地と思われる区画が見つかった。そこには、木棺墓四基、甕棺墓二六基、小型甕棺墓二八基が集中していた。その中で特に興味深いのが、韓国慶尚南道の金海貝塚(図)の甕棺を基準とした金海式の甕棺墓だったことだ。その型式から、その墓地が営まれた年代が弥生時代前期末〜中期初頭という古さだった、と解ったのである。

前二〇〇〇年頃には、本格的な生産が始まったらしい。その遺跡が中国河南省の二里头遺跡で見つかった工房跡である。その後、紀元前七〇〇年頃、朝鮮半島に製品と共に、生産技術が伝わり、ほぼ時を同じくして、本格的な生産が始まったとされている。朝鮮半島中部にあり、熊本県とも友好県となっている忠清南道の扶余郡松菊里遺跡を中心とした地域がその舞台で、これが日本列島への青銅器伝播の原郷土となっただろう。

日本列島に青銅器が本格的に現れたのは、紀元前四世紀中頃(中期初頭)のことと考えられている。福岡市早良区の吉武高木遺跡がそのことを教えてくれる遺跡で、一九八四(昭五九)



写真 吉武高木遺跡出土遺物 (福岡市立博物館 HP より)

また、この遺跡は、青銅器が日本列島に持ち込まれた事情を窺わせてくれた遺跡でもあった。つまり、木棺墓や甕棺墓から見つかったのは、細形銅剣(九口)、細形銅戈(二口)、細形銅矛(一口)、多鈕細文鏡(二面)、銅劍(二点)、碧玉製管玉(四六八点)、硬玉製勾玉(四点)、ガラス製小玉(一点)、有茎式磨製石鏃(一点)、小壺など。この中に、多鈕細文鏡や細形の銅剣、銅戈、銅矛のような、朝鮮半島からもたらされたものだろうと思われるものが含まれていたのだった(写真)。前期末から中期初頭にかけてのある時期の玄界灘沿岸には、朝鮮半島南岸の地域と交流していたムラがあったようなのだ。そして、そのムラを治めていた人物は、どうも彼の地の所縁の人物でもあったようなのだ。まさに中期とは、朝鮮半島の人々との交流が始まった時

代だったのである。

そんな貴重な遺物が見つかった夏女遺跡。ただ者ではない予感。そこで、次には、もっと具体的にみていくことにしたい。(つづく)

【引用参考文献】

- ・木崎康弘 一九九七 「第IV章 総括 三 球磨・人吉地方における古墳時代土師器編年」 『堂園遺跡・中尾遺跡・別府遺跡』 熊本県教育委員会
- ・木崎康弘 二〇一六 「球磨の考古地誌一五九 中期、青銅器登場の背景」 『週刊ひとよし』 第八八九号 人吉中央出版社
- ・木崎康弘 二〇一七 「くまがわすじの考古地誌一五「免田式」をとおう① 話題騒然、夏女遺跡の発掘」 『くまがわ春秋』 第二二号 人吉中央出版社
- ・園村辰実 一九九三 『夏女遺跡』 熊本県教育委員会

人吉藩の大洪水③

明和三年・四年の大洪水

尾方保之

宝暦五（一七五五）年の前代未聞の大洪水は、翌年の

助成金（手判銀）の貸付けをめぐって藩内が対立し、

二十六代藩主頼峯公を巻き込む「お家騒動」となった。

この騒動はそれで終わらず、二年後、後継者の二十七代頼央公の暗殺事件（竹鉄砲事件）となった。

それ以後も藩政は安定せず、宝暦から明和の十年間（一七五九～一七六九）に四人の藩主が次々に交代し、政治的混乱の時期となった。明和六（一七六九）年三十一代長寛公の相続により、ようやく安定に向かうことになった。

このような不安定な藩政の状態の中でも、災害は毎年のように襲い、経済的打撃を与えた。大凶作によって藩財政が逼迫していくことになった。

くりかえし起こる大洪水

明和二（一七六五）年は、三度の大風雨による大洪水と虫付により、損亡高は九千石であったが、翌年の明和三（一七六六）年は、損亡高が一万石を超えた。

『探源記六』によると、（読み下し文）

「同年四月末より雨降り続き、度々洪水の処、五月二十四日夜中より甚雨、翌二十五日辰下刻（午前九時）洪水、（常水に増水一丈七尺余…）御城内水付き外曲輪石垣崩れ一所、田島御損亡破損所等夥しく、飢人これ有り…」と記している。

五月二十五日の大洪水では、球磨川の水位が常水より五・二m（宝永五年の増水と同じ）も増水したため、人吉

城内が浸水し、外曲輪の石垣が崩れたという。田島の被害も大きく、藩が幕府に届けた損亡高は、

一 高老万式千九百八拾八石余 田島

となっている。約二万三千石の被害である。藩の惣高（美

高）五万三千石余の約四分の一の損害額となる。年貢米（四割）に換算すると、五千二百石の減少である。

領民の公役による御館橋の普請

石を超えた。二年連続の二万三千石の損害額である。年貢米の減損額も五千五百石余となった。藩にとって大きな打撃であった。

これにより四百五十一人の飢人が生まれたので、藩はすぐに救助の飢米を支給したという。

さらに翌年の明和四（一七六七）年には、五月と七月の二度

の大洪水、夏から秋にかけての大干ばつ、虫入りによって、損亡高は二万三千八百六十四石（現米五千五百四十五石余）となり、一万三千

明和三年五月の大洪水では、水位が五・二mも増水したため、城内が浸水し、外曲輪の石垣が崩れたが、同時に御館の御門橋も被害を受けたらしい。そのため石橋（現県指定文化財）に架け替えられることになった。この石橋普請は、領内のすべての寺社、武士や町人、農民の公役によって行われた。

この御館の石橋の架け替えについて、当時上村の庄屋であった鬼塚彦左衛門（西浦村戸越出身）は、「庄屋日記」に次のように記録している。

「御館御橋石にて懸替これあるに付、御郡中寺家社家御組の者並びに御家中知行被官まで御加勢夫として、山田領より深三（深水）瀬戸山往還、加子（鐘）太鼓のがく（衆）入り賑合しく、支度も随分勝手に木綿赤襦類（ネル）



現在の御館橋（人吉市中城町）

は折角此上なき様に相持へ、罷出候様にと仰せ渡され候。
」

御館橋の架け替えがなされるので、郡内寺社をはじめすべての武士や農民・被官まで、加勢夫として出役してもらいたい。

山田村から深水村の瀬戸山往還までの鐘や太鼓の衆入りによる石引き応援の準備は、それぞれ勝手に衣装も整え、参加するようにと仰せ渡された。

普請工事は日記によると、八月十六日の大村・薩摩瀬村・免田村の一番組から始まり、八月二十七日までの十二日間に全ての村四十二ヶ村が割り付けられている。須恵村のみが欠ける（深田村に含まれるのか？）が、山中の槻木谷や五木谷、皆越谷の人々も割り付けられている。出夫は大変だったにちがいない。

最初の薩摩瀬村や、山田村の当番のとき、男女の踊り手が出てきてにぎやかに前日は石引きを応援し、翌日は老神社と稲荷山において、なごらいの踊りをおどって盛りあげた。

それ以後、他の村々もそれにならい、前日は石引きを

応援し、翌日は両所で終日踊りをおどったという。石引きの安全と藩をあげての祝い行事として盛り上げたのだろうか。

普請の予定表によると、上村は一武村と田代村との組み合わせで、八月二十四日となっており、上村の三地区（里・永里・麓）から総計四百二十八人が夫力として参加した。このとき石引き用の板を持参した。その他に踊り手が秋時（うす太鼓）、麓（ちゅうしんくら）、脇（あつもり）など、雨乞いときの出し物の衣装を準備して、十二部落から参加している。人数はわからない。

石橋にくわしい黒肥地改太郎氏によると、この石橋は十月に竣工したと記録されているようである。また御館橋は、県指定文化財の石橋の中で最も古いのではないかとのことである。

大水害後の厳しい事情の下で、夫役に参加することだけでも大変なことなのに、踊りをおどって領民総出で盛りあげたということに驚かされる。御館橋は、領民の血と汗によって完成した貴重な文化遺産であることを知らされる。

地震と火災が追撃

明和三年・四年と大水害が連続して発生し、藩と領民は大きな痛手を受けたが、その後地震と火災に襲われた。

三十一代長寛公が家督を継いだ明和六（一七六九）年七月、人吉大地震が発生し、城内をはじめ各地で建物などが破損した。さらに八月には大風雨洪水により、この年の損亡高は一万二千石余となった。そして翌年の明和七（一七七〇）年には、八代の植柳にある八代御仮屋が全焼した。人吉藩の参勤交代や物資輸送の基地であり、百四戸の住居と約六百人の水夫などが住んでいた。復旧に多額の経費を要することになった。

ところが、八代御仮屋焼失の二年後の明和九（安永元年二月、江戸の上屋敷が類焼した。この年も五月・七月の二度の大風雨により、八千石の損亡高となっている。

藩には上屋敷再建の余裕はないが、そのままにしては置かれない。御家中や領民たちが資金のため、献上願いを申し出た。藩はそれを受け入れ、献上米（上ケ米）を

徴収することにした。名目は献上米だが、臨時税の徴収である。

『相良家史料三四卷』（県立図書館）によると、家禄百石以上の武士は、百石に付米一石八斗の割合、百石未満の武士は、十石に付米一斗の割合で献上するものであり、これにより三百四十石余の献米があった。

農民たちは年貢米一石に付二升の献米で、四百六十一石余の献米となった。合計八百石余の献米である。人吉町の町人や椎葉山・五木・槻木の住民たちは、銀錢を献上し、合計二十五貫七百匁（金約四三〇両）が献上されたという。武士や領民の献上により、翌年安永二（一七七三）年十一月、江戸上屋敷は再建された。

以後も災害がくりかえし起こり、田畠や家屋を破壊して領民を苦しめ、藩財政の窮乏化を進めることになった。

（おわり）

【おがた・やすゆき／求麻郷土研究会、球磨郡錦町】

※前回訂正 60頁の「五・二m」を「五・一m」に、64頁の「金家騒動」を「金屋騒動」にそれぞれ訂正いたします。

天草の「五足の靴」

「パアテルさん」と「茂助」は何処に居る⑥

富永和信

この稿は『五足の靴』の原文を抜粋したものに筆者の注記を加えたものである。

『五足の靴』原文より

(十二) 大失敗

五足の靴は驚いた。東京を出て、汽車に乗せられ、汽船に乗せられ、ただ僅に領中振山で土の香を嗅いだのみで、今日まで日を暮したのであった。初めて御役に立って嬉しいが、嬉しすぎて少し腹の皮を擦りむいた、いい加減に御免を蒙りたいという。しかし場合が許さぬ、パアテルさんは未だ遠い遠い。

＝略＝

こは面白い、宿ろうというH生の提議もパアテルさんには敵わん、H生は詩を作る。

わかうどなれば黒髪の

香をこそ忍べ、旅にして

わが歴史家のしろうごと、

『パアテルさんは何処に居る。』

＝略＝

葡萄の棚と無花果の

熱きくゆりに島少女

牛ひきかよふ窓のそと、

『パアテルさんは何処に居る。』

かくて街衢は紅き灯に

三味もこそ鳴れ、さりとは

天草一揆、天主堂、

『パアテルさんは何処に居る。』

【筆者注記】

この項は『五足の靴』のメインとなるH生（北原白秋）の詩、「パアテルさんは何処に居る。」が中心となっている。

私もこの詩を初めて目にした時、一瞬にして心が揺さぶられた。

“大失敗”とは、彼らの無謀な足取りであろう。天草富岡に着いてからパアテルさんに早く逢いたい一心で、大江まで一気に強行軍し、夜十時過ぎにようやく辿り着いた。途中いろいろなハプニング続出であったが、港近くの汚い旅館を見つけた。しかし生憎の満室で断られたが、そこを若者特有の厚か

まさきで道具部屋らしきところに泊めてもらった。

その宿こそ現存する「高島屋旅館」である。私は今回の調査探訪の折当旅館を探し訪ねて、現在の三代目女将・小林ハナさんにお会いすることができた。ハナさんの話では、「平成二十三年頃までは、やっこのことで営業しとつたですが、翌年に廃業したとです。与謝野さん達が無理矢理泊まったのは二階の物置部屋あったと聞いております」

現在の建物は改築されており、当時の俵はなく、アルミサッシの窓枠が西

日に当たつてまぶしい。

五人のうちの一人、H生が翌朝、近くの散髪屋に髭剃りに行って、昨夜遅く道に迷つたが、幸い巡査に逢つて助かつたと話したところ、床屋のおやじから、いろいろうるさく問いかけられた。最後に「結局、貴方たちやあ何しにそぎゃん歩きまわる旅をしなさいと。そぎゃん金ばどぎゃんして儲けてきなはつとな」とやられ、返答に窮してほうほうの態で帰ってきた。

「余談」

吉井勇氏は昭和二十七年五月、一人で天草を訪問し、感慨の歌詩を遺した。

どこにも行きし友みなあらず

我一人老ひてまた踏む天草の島

“白秋とともに泊まりし天草の島”

大江の宿は伴天連の宿

また、与謝野寛、晶子夫妻も昭和五年に天草の地を訪ね、歌を遺した。

“天草の島のあいだの夕焼けに

舟もその身も染めて人釣る”

“なつかしや天草の土口づげん

二十五年を経てまたも来ぬ”

与謝野寛

“天草の西高浜のしろき磯

江蘇省より秋風ぞふく”

“人しばし船をつなげば青玉の

光を放つ洞門の水”

与謝野晶子

与謝野寛、吉井勇の二人にとつても明治四十年の『五足の靴』天草の旅は、忘れ得ぬ大きな意味のある旅だったに違いない。

【とみなが・かずのぶ／山口市】



五人づれ 著 『五足の靴』 (2007年、岩波文庫)

稲留二郎の世界⑥

「巻三」家作り見舞い」のくだり――



前田一洋

「客、玄関に来て、①頼む、②頼み申す、③おうちいござんすか、④居りやり申すか、⑤居るかよという声を聞いて亭主出迎えて、いや珍らしゅう、①まあこちいおいでなさんし、②お入りなさんし、③上がりやれ、④入りめせ、⑤入りやれ。⑥さあさまこれにおいで」。家作り見舞いは新築祝いのこと。訪れた人の身分や親密度などによって、①～⑥のように使い分けがなされていたようです。

を唱えて、柱に手を掛け立ち上がり、天井の貼り出し、長押（なげし）の入れ方、それぞれに気付けて見るところに息子の愚太郎、弟の善郎（よかるう）こそこそ出て来て、おっちいござんしたげな（いらっしやい）。来たかよ。こなたさんのところも、皆お達者でござんすぞう。客おお、家も皆がんじゅうか（元氣）ばい」。元々手伝いに来る気持ちなどなかったのだが、そこはまあご挨拶。アトツトさんとは、「あら尊」の俗語。先端に金鶏（きんけい）が止まった弓を持つ神武天皇の掛け軸などでしょう。天井の棧が縁起の悪い「床刺し」になつてはいないかとか、まさかの時には武器となる長押の入れ具合など見所は抑えています。そこに立現われましたるは二人の息子、見るからに

「亭主、まづまづ久しぶりイお目にかかり申した。ご老公にもお達者なことにお元気で結構な事でございます。客、あい有難うござんすが年を取つてよか事アござり申さんばい。年が寄ると気が弱りて、心もほげけて、眼はかすみ、耳は遠うなる。齒は欠け落ちて、腰は曲がりて、鼻たれて、何でも聞きたがり、見たがり、行きたがり、出たがりして、どんこんならん。これが本当のドモたいぬう」。

ぼんやりとした長男。対するはいかにも賢そう弟。「来たカヨ」などの挨拶をしたのはきつと兄の方でしょう。どこの家庭も同じこと。「客、家が綺麗に立派に美しくしゅう、ようでけたばい。おれも普請（建築）な好きで、見たかつたでー先途から来たかつたれども、しじゅう来るかみやーがなかつたが、えー勝手にでけたばい。座敷、次の間、新家（あらけ）、蔵前（ごんぜん・仏間）、居間、納戸、台所、土地（どち）の間取り、棚、押し込み、火炉（じろ）の据え所、漬物桶の置所、鍋釜の据え方。青椿、雪隠（せっちん）、閑所（かんぜ）の付け所、戸や障子の立付け、敷居の入れ込み等に至るまで、一々行き届きたる仕事、まことに目を驚かし申すばい」。

客はご老公なので藩政時代はかなりな身分の方らしい。それでも老衰という苦は免れ難いとみえ、そのあらわれを嘆いています。

「亭主、ごもつともごもつとも。昔から出たがるものは、年寄とつづれちゅうて言うことじやらーよ。それで、何にも頓着アなか。これから長う生きちやーおらんでー、気促（きせま）アしておりやれ。それがよか、それぞれそれが本の極楽たい。南無阿弥陀、南無阿弥陀」。

「こも先途から家作りやるちゅうて聞いたでー、何でも加勢に来るつもりでおつたれども、始終来るかみやーがなかつた。ようでけたばい、美しいこと。床の掛け物アアトツトさん。前は花が上がつておる。ああ南無阿弥陀と、思めーもせん空念仏

読者の皆様、どうかご幼少の頃のお住まいを思い出してみてください。家屋の中で日当たりから景色まで特等の座敷、来客を持って成す大切な部屋。さらに祝儀（結婚式）や仏事などで大勢の客がある時には、仕切りの戸や障子を外し次の間や新家なども動員しました。

蔵前は「隠れ門徒」時代の遺構として、仏間を板戸や襖で仕切つてある家も。台所はハンスシモとも言つて、切り石の流しやクドなどが据えてあり、たいいてい土間になっていたようです。またジロには、鉄鍋での煮炊きやお湯を沸かすクワヌス（罐子）が、じじやー（自在）鉤（かぎ）に掛けられていて、年から年中生木の「火のとぎ」がくすぶつておりました。

【まえだ・かずひろ／人吉市】

450年念し
生誕き下ろし
生記書

小説・相良清兵衛

10

山口啓二

清兵衛頼兄の屋敷では、七十を過ぎ武道指南役を漸く解かれ一武村切原野で百姓をしていた丸目蔵人佐鉄齋が、奥座敷の隣の囲炉裏のある部屋に案内され座していた。囲炉裏の火の温もりが心地よい季節になっていた。

「ときに丸目殿、先だって貴殿に果し合いを挑んできた黒田家ご家中の若者がございましたな」

「黒田家の家臣と申せば、ああ、先日みえられた、たしか宮本武蔵殿の事でござるか。若くして勢いのある青年でござったのう。はて、かの御人は私に挑みに参ったのでござったか。そう言えば何やら落ち着きがのう見えました、そうとは知りませなんだ。あははは」

蔵人佐の話はどうも嘘くさかったが、そこはあえて追及はしなかった。

囲炉裏には大きな鉄鍋が用意され、煮え滾った出汁の中に野菜と共に蔵人佐鉄齋が持ってきた分厚い肉が入られた。天草の河内浦にある蔵人佐の妻、加奈の実家から贈られた肉である。

横に座っていた内蔵助が不思議な顔をして箸を動かしていた。

「はい若、これは鯨の尾の身にござりまする。天草の西の海で獲れましてござる。拙者若い頃数頭が群れをなして泳ぐさまを何度か見た事がござったが、初めて見た折はまさに中川原が動いているようで、背中から潮を噴き上げる様には仰天したものとござる」

「ほう、これが鯨の肉でござったか。さすがの父上も鯨は初めてでございますか」

「うむ。海の魚と言えば参動にお供した折りに鯛の煮付けや塩焼きなどは食した事はあつたが、鯨という物は初めてでござった。いやあ大いに満足いたし申した。ここ人吉で魚といえは鮎や鯉、それに鰻の如きものじや」

「そうですな。鯨はそう、球磨川に大きな亀石が何頭も泳いでいると思えばよろしかろうか。それを大勢の漁師が沖まで舟に乗り銚で仕留めたものにございます。それを切り分け、その場の磯で大鍋で野菜と一緒に放り込み、煮て皆で食しております。鯨の磯鍋と申しておりますかなあ。

「前回までのあらずじ」父休矣の後を継いだ清兵衛は、藩内の本格的な基盤整備を進めていった。そして時々思い返すのは、かつての秀吉や深水宗芳と交流した思い出であった。

「ほう、その赤い肉は何で御座ろうかな。およそ獣の肉とは思えぬが」

「もうそろそろ煮えたで御座ろう。味噌が溶けましたのでどうぞお召し上がりください」

家中の者も囲炉裏の周りに集まり、酒も用意されて皆で鍋を食する事となった。

「うーん、肉はちと硬いが味はなかなかのもんじや。さてこれは何の肉かな。骨も見当たらず、今までに喰った事も無いようじやが」

「なかなか旨いものにございまするな父上。猪や鹿とはまた随分ちがいますが、鉄齋殿、はてこれはなんの肉で御座りましょうや」

何度か喰いもうしたが、あの味が未だに忘れられませぬ」

「ではこれはこの球磨の地では初めてのものじやな。しからば『鉄齋鯨鍋』とでもいたそうぞ。丸目殿、今宵は何とも珍しき物を頂戴いたしました。誠にもってかたじけのうござる」

「それは誠に恭悦に御座ります。沖で捕れた鯨の尻尾の肉を塩漬けにして送ってくれましてござる。鯨の尾の身は何と言つても刺身で食するのが一番に御座いますが、ここ球磨までは生では到底運べませぬ。で、塩をまかし、それを一晩水に浸して塩抜きすればこのように美味しく頂けます。なあに、そのまま焼いて喰う手もござりまするが、昔の鍋が懐かしゅうて。あいや、しかし生の尾の身肉とはまた一味違いますなあ」

夜も更け、鍋の具も大方無くなり、清兵衛と鉄齋は囲炉裏端に二人だけ残つて酒を酌み交わした。

酒といつてもここで作られる『米焼酎』のことで、燗をして独特のガラとチヨコでいただく。

雑穀で作る焼酎はあちこちにあつたが、こは米が良く採れるので焼酎の原料も米だ。から辛はこの時代にはまだ薩摩にさえ伝えられておらず、そのころ焼酎の原料は専ら粟や稗などの雑穀が主であった。

■主な登場人物

相良清兵衛 (犬童頼兄) = 相良家 家老
丸目蔵人佐 (鉄齋) = 相良氏家臣の兵法家

「ときに丸目殿、ここだけの話でございますが、そなた今でもキリストの教えに従っておられるのですしたな。『パウロマルメ蔵人』とか言う洗礼名もいまだお持ちだとか。実はですな、建造中のわが屋敷内に出来れば密かに礼拝の場所やら洗礼の池やらを取り入れたいものじゃが、如何すればよいものかと思索しております。宇土の小西殿とは朝鮮から帰国してのち、幾度となくお訪ね致しいろいろご享受頂き、そのおりにも宣教師から聖水池の事を聞いた事はあると仰せられたのじゃが、遂にいい知恵は授けて下さらずにああいう事に相成り申した」

「ですのう。小西殿は我ら耶蘇教徒にとっては誠に残念な方を亡くし申したが、あいどん、社寺仏閣をすべて取り壊すあの方の手法では徳川様が御認めにならうはずありません。

特にこの球磨の地は相良家が統治なされる前の神仏も、みな領民にこのほか大事に守らせていただきます。それでこの地は安泰でございます。されば、小西殿にないこの球磨の地に適したやり方があるうかと」

「ほう、さて如何いたしましたしょうかのう」

焼酎に酔ったのか、普段は言葉少ない蔵人佐鉄斎はいつもより口数が多くみられた。

「おう、それは重畳ちゆうじやうなるほど屋敷内の建物の床下の数か所にその聖水の池を造るといふ案にございましょうや。そうじゃ丸目殿、その上に仏堂などをこしらえればよもや疑われることはありますまいかと」

「なるほど、仏堂にござるか。それは誠にもって妙案にございます。仏堂の地下にまさかそのような物があるなど、それは誰も気付きませぬな」

「さて、その地下室とやらの形じゃが、どうにかその絵図面思い出してはくれぬかのう」

「どうじゃ、アルメイダ師はすでに亡くなりましたが、他の耶蘇教徒とはまだ何とか秘密裏に連絡が取れますゆえ、もしかしたらその絵図面の写しを送ってくださいませいか聞いてみましょうぞ」

「おお、そうしてくださるか。流石はパウロマルメ蔵人殿。お話でおぼるげには解るのじゃが、せつかく造るのに肝心の礼拝の場が違つておつたらはいかぬので」

「アルメイダ師は本来は医者で彼のご先祖はユダヤ教徒、それを無理やりキリスト教に改宗させられたそう。で、その子孫の彼は医学を極めイエズス会に入会して、我が日の本へ渡られキリストの教えを広められた方。拙者は彼から西洋医

「小西殿の仰せられた聖水池とはあいやもしかしたら、西洋には洗礼の儀式が取り行われる聖水の池があるとイスパニアの宣教師や伴天連の尊師から伺ったようにございます。あいやそうじゃ、思い出し申した御家老、拙者がイスパニアのルイス・アルメイダと言う宣教師と親しくしております折り、それらしき絵図面を見せていただいた事がござい申した。階段の下に踊り場が、そのまた下には石を敷き詰めたような広間があり、さらに数段の階段の先は深い池になってござったようでした」

「ほう、やはりそういう所があるのですな。どうにかこの屋敷内にも造ればいいのじゃが」

「屋敷の中に造るとあらば、そうですのう。建物の床下に隠して造るしかあるまいか」

「建物の床下でございますか。うまくすれば隠し通せるやもしれませぬな」

「勿論、先程申した通り耶蘇教などの異教は徳川幕府がこのちお認めになるとは思いません。さすれば今のうちに御屋敷のどこか床下にも礼拝と洗礼の出来る場所を造るというのが最善かと。それも一か所ではなく、もしも見つかったらば次はもう叶いませぬゆえ、数か所に造るといふのは」

術についてたくさんの事を学びました。天草にもしばらくおられ、確か豊後府内の地で医者として活躍なされておられました。そうじゃ、御館みだちの傍に奥方様専用の礼拝所も造られ、その上には易堂でも造られました。さすればすでに御館との間にありますあの高い石垣には階段が要りますな。そしてあと一か所は御家老専用の船着き場の際にでもお造りなさいませぬ。それがもし見つかったとしても残りは安泰かと」

「おう、それが良からうて。しかし屋敷の床下にそのような部屋を造る事が、さて本当に出来ますでしようや」

「いえ、それには及びませぬ。豊後の石工共はこと石の扱いは特に長けてございます。たとえ真つすぐな石積みであろうとも、いとも簡単に積み上げる事にございませうぞ。おう、そうと決まれば早速段取りを致しましょう。先ずは絵図面を何とか手に入れねば。さてさて、これは忙しくなります」

「いやはや、丸目殿の見聞の広さには恐れ入りましたござる。何卒良きにお計らい下され」

「なあに、百姓はこれから暫くは暇な季節になります。ちやうど良い仕事が見つかりましたわ。あはは」

(つづく)

【やまぐち・けいじ／人吉市】

問1 日本人のノーベル賞受賞者の名前を10人あげよ (例: 本庶佑)

- ① ()
- ② ()
- ③ ()
- ④ ()
- ⑤ ()
- ⑥ ()
- ⑦ ()
- ⑧ ()
- ⑨ ()
- ⑩ ()

問2 女性の大蔵大臣経験者を5人あげよ (例: 片山さつき)

- ① ()
- ② ()
- ③ ()
- ④ ()
- ⑤ ()

問3 秋を含む言葉を5例あげよ (例: 食欲の秋)

- ① ()
- ② ()
- ③ ()
- ④ ()
- ⑤ ()

問4 エンブリー夫妻についての以下の記述は正しいか。正しいときには○を
間違いのときには×をつけよ

(例: 夫・ジョンは『須恵村』の作者である。○)

- ① 夫妻は須恵村の覚井に住んだ
- ② ジョンは交通事故で死亡した
- ③ エラ夫人は日本語をまったく話せなかった
- ④ 昭和10年の須恵村では新聞を購読している人はいなかった
- ⑤ 夫妻はふたりとも再婚同士であった

問5 次の写真の名前を書け (ヒント: 本誌30号)



① ()



② ()

※答え合わせは次号でおこないます。前回の答え合わせは86頁で。

くまがわ春秋歌壇

いもこ短歌会

「基地よりはアジアと日本の架け橋に」翁長氏の夢 沖繩の道

「誇りある豊かさ」求め生き抜きし翁長雄志のバトンをデニーへ

柳原 三男

ふる里の稲田の黄緑きみどり広々と豊作を待ち老夫婦立つ

頭こぶたれ稲穂は風に揺れており寄り添うごとく彼岸花咲く

坂本 ケイ

「二年後にオリンピックを見に行こう」夫の言げんにリハビリ励む

介護の身になりたれど生きていく日本の未来もつと見たきに

上田 勉子

雲の上歩くがごとき歩みにて〇歳児クラスの笑顔のあんよ

よろけつつも己れが足で歩き立つ頑固な父の卒寿の表彰

宮川しのぶ

翁長知事の急死の報に胸ふたぎ平和祈念の式典に臨む(長崎原爆忌)

遺志を継ぎ一ミリたりともぶれはせぬ玉城デニーの決意の清すがし

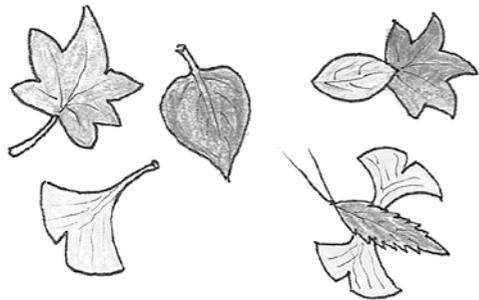
上田 精一

おっとわっとあすび その②

絵と文／松舟博満

秋んひなればハゼノキやモミ
 ジン葉っぱんまつきゃ（真っ赤）
 んひなつて、いちようん葉はきのう
 （黄色）なつてつこけおつた。
「いちようん実」 学校のもど
 ん道、いちようん実ば炒つて食
 えばんまかて聞いとつたもんで、
 唐渡ん神のいちようん木の下の
 いたて、実のびつしゃげとつとは
 臭かつたでびつしゃげとらんとば
 ひるうて、家さん持つて戻れば、
 「そぎゃんとば取つて来て何ん
 ばすつと」て云わんもんで「炒つ
 て食うとたい」て云えば「食う
 となつば側たんば取つて中ん種
 だけんせんばんで、茶摘テゴン

唐渡ん神といちようん実



入れて川ん持つて行たて、棒で
 コジツ（こねる）てんの、汁ん
 のひつつけば痒うなつてね」て云
 わんもんで毛イモばコジツやつこ
 て、側たんのカスば流し流し
 しながら種ばつかりんなつたと
 ば茶摘テゴン中きゃ入れてこじつ

て洗るうたとば家ん戻つて乾きや
 ておきおつた。
 かあさんの飯ん用意はしおつ
 やるクドんオキばちつとこさぎ
 出して、そん上ん乗せて焼き
 おればパンていっぽしつてどけか
 つうで行きおつたで「カナシヤツツ
 （カナズチ）でちつとヒビば入
 れてんの」て云わんもんで、一ちよ
 づつヒビば入れて焼けば、いっ
 ぱしる代わりんヒビから汁んの
 出てきて、そん時オキハサミで
 はすうでひつくりかやきやて、汁
 ん出らんめえひなれば焼けたで、
 ヒビん入つた所から爪で割つて
 食うてみれば、ちつたあ苦かつた。

【まつふね・ひろみつ／青井阿蘇
 神社・文化苑「童遊館」】

俳句大学 Haiku University

今月の秀句

Selected Haiku of this Month

永田満徳選評・向瀬美音訳

<https://www.facebook.com/groups/1805562046390300/>

Haiku Column ②

Jeanine Chalmeton

●
 automne serein ~
 elle graisse ses boots d'équitation
 [Commentaire de Mitsunori NAGATA]
 On voit la préparation parfaite pour l'équitation,
 Le Kigo "automne serein" décrit le moment joyeux
 de l'automne.

ジャンン シャルメトン

●
 秋うらら
 乗馬のブーツに油脂を塗る
 [永田満徳評]
 乗馬の楽しみに胸膨らませながら、そ
 の準備に余念のない様が目に浮かぶ。
 「秋うらら」の季語によって、幸福な
 秋のひと時が詠み込まれている。

Francesco Palladino

●
 Far far a steam train
 Evening cold
 [Commented by Mitsunori NAGATA]
 It is successful to describe the scene of steam
 train in the distant view and with Kigo
 `evening cold` we feel the loneliness of winter
 evening.

フランシスコ パラディノ

●
 はるか遠くの蒸気機関車
 夕寒し
 [永田満徳評]
 蒸気機関車の通り過ぎる情景を遠景に
 持ってきたところがよく、「寒し」とい
 う季語の斡旋によって、冬の夕べのうら
 寂さが詠み込まれている。

Sara Masmoudi

●
 l'odeur du pain emplit la bourgade~
 lune de l'aube
 [Commentaire de Mitsunori NAGATA]
 La scène du village est décrite avec l'odeur
 du pain, cuit tôt le matin. Avec le Kigo "lune
 de l'aube", on ressent la paix du village.

サラ マスムディ

●
 パンの匂いが村を満たす
 夜明けの月
 [永田満徳評]
 パン屋が早起きして焼く「パンの匂
 い」に包まれている村を描き出して
 いる。「夜明けの月」が照らす、のどか
 で平和な村を詠んで、秀逸である。

【ながた・みつのり／俳人協会会員、熊本市】

前号【くまがわ学習塾②①の答え】

問1 山頭火の句を10句書け (例: 焼き捨てて日記の灰のこれだけか)

- ① (蝉しぐれ死場所を探しているのか)
- ② (けふのみちたんぼぼ咲いた)
- ③ (朝は涼しい草鞋をふみしめて)
- ④ (あの雲がおとした雨にぬれている)
- ⑤ (岩かげまさしく水が湧いている)
- ⑥ (ここで泊らうつくつくぼうし)
- ⑦ (炎天下の下を何処へゆく)
- ⑧ (雲かげふかい水底の顔をのぞく)
- ⑨ (一すぢの水をひき一つ家の秋)
- ⑩ (しずけさは死ぬばかりの水がながれて)

問2 弊社(人吉中央出版社)発行の著作を5冊あげよ(例:伊勢戸明『くま春秋』)

- ① (木崎康弘『肥後と球磨 その原史社会に魅せられし人々』)
- ② (岐部明廣『日本遺産 相良三十三観音巡礼』)
- ③ (北御門二郎訳『トルストイ短編集』)
- ④ (尾方保之『概説 相良藩』)
- ⑤ (渋谷敦『なば山騒動異聞記』)

問3 相良33観音巡礼の観音像堂を5例あげよ(例: 覚井観音)

- ① (上手観音)
- ② (永峰観音)
- ③ (栖山観音)
- ④ (めぐり観音(廻観音))
- ⑤ (上園観音)

問4 七夕綱が残っている地域を3地区あげよ(例: 木々子)

- ① (芦北町祝坂地区)
- ② (芦北町下白木地区)
- ③ (芦北町岩屋川内地区)

問5 エンブリー夫妻についての以下の記述は正しいか。正しいときには○を間違いのときには×をつけよ(例: 夫妻は須恵村を調査した○)

- ① 夫妻はその後離婚した ×
- ② 夫妻には子どもがいなかった ×
- ③ エラ夫人は33観音を巡礼したことがある ○
- ④ 夫妻は八代駅を利用したことがない ×
- ⑤ 夫妻はドイツ人の研究者である。そのため昭和10年に日本の農村を研究できた ×

問5 次の写真の名前を書け(ヒント: 本誌29号)

- ① (旧くまがわ荘)
- ② (日奈久赤レンガ)

がん治療に光!!



本庶佑氏(京都大学の特別教授)

2018年

ノーベル医学生理学賞

げっかん・ぎびょう

うんご...

— 免疫を抑える働きを持つ分子を発見!! —

本庶 佑さん(76歳)が今年のノーベル生理学・医学賞に輝く。10月1日、京都大学で開かれた記者会見で「より多くの患者を救えるよう努力を重ねる」と語り、がん患者や研究者から祝福の声あがる。

すべての人を自分の親だと思って...





○特別養護老人ホーム

○短期入所生活介護

○通所介護事業所

○居宅介護支援事業所

社会福祉法人 天雲会

龍生園

〒868-0086 人吉市下原田町瓜生田1057-9

施設部門 ☎0966-22-6621 FAX 0966-22-6622

在宅部門 ☎0966-22-2141 FAX 0966-22-2183

www.ryuseien.jp/
e-mail: tenunkai@ab.wakwak.com

編集後記

今月はかねてより原稿の依頼をお願いしていた大平和明さん（4頁）と、大倉隆二さん（7頁）の論考を掲載し、「隠れ里の神さん仏さん」と題した特集を組んだ。古いものが普通に残っている稀有な地域、人吉・球磨の魅力を紹介できたかと思う。★9月22日には八代駅前の珈琲店ミツクで開かれた「みんなで麦島写真を語ろう会」に参加（20頁）。ご遺族の参加もあり、普段の麦島さんのことを知ることができた絶好の機会であった。★2号にわたって「週刊ひとよし」代表だった伊勢戸氏のことを取り上げた（44頁）。氏とは10年ほど机を並べて仕事をした。いつも小さなノートパソコンのキーを叩いていておられ、たまに「うーん」と唸ることはあったが、ものの30分ほどで記事一つが完成。特に力を入れたおられたコラムもすらすらと書かれていたように思う。後年、そのノートパソコンは闘病中の伊勢戸氏の病室にも持ち込まれ、コラムの執筆は続けられた。病室ではいろいろ聞いておきたことが山ほどあったが、その時は時間に追われていて言い出せなかった。今でも時々思い出す苦い思い出である。（ま）

〒868-0015
熊本市下城本町1436-4の3号
人吉中央出版社「くまがわ春秋」編集部
info@hiyoshi.co.jp
電話・ファックス 0966-23-3759

インフォメーション

開催中

- ▽企画展「やまへのほとけ展2018」(11月25日、山江村民俗資料館)
- 10月19日(金)
▽秋季特別展「ザ・家老 松井康之と興長」(11月25日、八代市立博物館未来の森ミュージアム)
- 10月20日(土)
▽人吉球磨総合美展(11月25日、人吉市スポーツパレス)
- ▽フロイデコンサート2018人吉(ひとよし森のホール)
- ▽球磨中央高・球磨商百貨店(11月21日、同校)
- ▽ひとよしくまごも劇場例会「人形劇団ののはな『ちいぢいにんじん』(山江村農村環境改善センター)
- ▽ふれあいまつりくまむら(11月21日、球磨村総合運動公園)
- 10月27日(土)
▽たけだ文化財かるたスタンプラリー「秋のまち歩きイベント」(多良木町内)
- ▽第3回さがら産業文化歳(11月28日、相良村総合体育館)
- 10月28日(日)
▽犬童球溪頭彰音楽祭個人コンクール本選(人吉市カルチャーパレス)
- ▽「日本でもっとも豊かな隠れ里」サイクリング人吉(人吉城跡ふるさと歴史の広場集合)
- ▽ノスタルジック人吉(JR人吉駅前広場)
- ▽五家荘紅葉祭(11月30日、五家荘一帯)

匠の技

御膳醤油

(だし入り万能しょうゆ)

◆納豆みそ (お徳用) 300円 (税抜)
◆みそ煎餅 477円 (税抜)

◆納豆みそ 477円 (税抜)

人吉散策コース 九州特産 蔵めぐり

みそ・しょうゆ蔵

資材社 釜田醸造所
マルカマ 会長 釜田元嘉頭
社長 釜田嘉頭

〒868-0001 熊本市人吉市鍛冶屋町16
電話 (0966) 22-3164
FAX (0966) 22-3165
メール info@marukama.co.jp

たけだ眼科クリニック

院長 竹田 憲司
人吉市南泉田町39 ☎23-3096

めがね・コンタクトレンズの

アイウェア 榎

(たけだ眼科ビル内) ☎0966-23-3097

デイサービスセンター

いざみ

ケアプラン作成所いざみ (居宅介護支援事業所)

協力医療機関 たけだ眼科クリニック
人吉市南泉田町70番地の3 ☎0966-28-3307